

人口問題研究

第二卷 第十一號

研究

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

島村俊彦

目次

- (一) はしがき
- (二) 婚姻及び離婚
- (イ) 婚姻數
- (ロ) 婚姻年齢
- (ハ) 離婚
- (三) 出生
- (四) 戦闘員の死亡

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

- (イ) 戦傷病死數
- (ロ) 戦死者の年齢、配偶關係
- (ハ) 戦死者の死因
- (五) 非戦闘員の死亡
- (イ) 死亡數
- (ロ) 年齢、體性別死亡
- (ハ) 大戦前後に於ける死亡の比較
- (ニ) 出生率、乳兒死亡率及び死産率
- (六) 戦時中に於ける總死亡
- (イ) 總死亡數
- (ロ) 年齢、體性別總死亡
- (ハ) 獨逸以外の諸國に於ける總死亡
- (ニ) 獨逸に於ける死因別總死亡
- (七) 戦時中の出生超過
- (八) 戦時に於ける移民運動
- (九) 大戦後に於ける年齢別體性別構成の變化
- (一〇) 要約
- (一) はしがき

一八七五年以來低下の傾向を辿りつつあつた獨逸の出生率は、本世紀に

入ると共に、その減退歩調を早めた。一方一八七五年以來著々として改善せられつつあつた死亡率は、最初のうちこそ出生率減退を補つて餘ある状態であつたが、出生率が急歩調を以て低下するに従つて、最早死亡率の改善を以て出生率低下を補ひ得ざる状態に陥つたのである。かくて前世紀末と本世紀初期に於て最大値を示した獨逸の自然増加率は大戰前に於て年々低減を續くるといふ状態であつた。

獨逸はかかる憂ふべき人口狀勢を以て大戰へと突入したのである。

近代戦争が人口に對して極めて有害な、そして巨大な破壊的影響を與ふるものであることは既に周知の通りである。

召集は多くの男子から長期にわたつて再生産の機會を奪ひ、之によつて突然激しい出生減退を惹起せしむる。

更に多數の兵員の死亡は最も健康にして、又最も活動力ある國民層を失はしめる。又國土が戰場とならない場合に於ても銃後國民の死亡は、戦争によつて誘發せらるる各種の原因によつて増加せざるを得ない。

戦争は又婚姻數及び婚姻年齢に影響を及ぼし、従つて、それを通じて出生は一層減退する。

更に戦争は國民經濟より最善の勞働力を奪ひ、その結果婦人勞働、少年勞働は以前よりも急激に増加し、又それは、戦前には専ら男子成人勞働力をもつて營まれてゐた職業や産業部門に於ても増加せざるを得ない。更に兵役義務なき老人の勞働力は戦前に比し著しく強化されるであらう。之等の現象は銃後國民の死亡と無關係ではあり得ない。又婦人勞働の増加は種々の原因と共に婚姻、従つて出生へ好ましからざる影響を與へるであらう。

又戦時に於ける勞働保護政策的施設は目前の戦争目的貫徹のために犠牲

となる可能性は大である。従つて之等は母子の健康と出生にとつて好ましからざる影響を與へるであらう。

又戦争の繼續と共に醫師及び醫藥の不足を來し、醫療の惡化はまた死亡に反映せられるであらう。

更に戦争が長期となるに従つて、人口を充分に扶養することは愈々困難となるであらう。

それは再び健康傷害に導き、死亡を増加せしめるであらう。

戦争が經濟、人口の量竝に質に及ぼす等の影響は總ての交戦國に於て見らるる處であるが、その影響の強度は種々の條件に従ひ、國によつて異なるであらう。例へば動員の規模、作戦の期間及び方法、生産力特に戦時に於ける生活物資就中食糧の生産或は供給の如何等は人口の受くべき損害を規定する重要な條件である。

さて一九一四年八月、獨逸は前月より行ひつつあつた大動員の一段落を俟つて遂に參戰した。一九一四年の交戦月數は八月以降の五箇月に過ぎなかつたのであるが、この五箇月間に實に二十四萬餘の戦死者と之に數倍する戦傷病者を出したのである。又銃後の非戦闘員についても、一九一四年には早くも死亡の増加が現れてゐるのである。

かかる戦争の人口破壊的影響が漸次明かになると共に、又從來既に明瞭に認められつつあつた出生減退とも關聯して、ここに獨逸將來人口についての識者の憂慮がいよいよ深められたといふことは極めて當然のことであつて、戦時及び戦後にわたつて、人口對策の必要が力説せられ、採らるべき人口對策についても論及せられたのであつた。

然しながら、戦後の獨逸の疲弊、混亂はさすがの獨逸をして有效なる人口政策を施すことを許さなかつたのである。

獨逸に於ける人口政策は戦後の十數年を無爲に過したるのち、一九三三年に至つて始めて採上げられたのである。ときすでに人口は極めて憂慮すべき状態に陥つてゐたのであつた。

獨逸に於て、若し一九三三年以後に施された人口政策が假に第一次大戦時から、たとへ徴々たるものにせよ採られて居つたならば、戦後の獨逸は現に見られたよりは遙かに良好な人口状態を維持し得たであらうことは疑ひない。

戦時に於ける人口政策の實施には非常に多くの困難を伴ふものであらう。然し戦争の人口破壊的作用は時々刻々に人口を浸蝕しつつあるのである。人口防衛の手段が施されること早ければ早い程戦争の影響はいよいよ輕減されるに相違ない。

従つて綿密周到なる人口政策が策定實施せらるることは元より望まじきことであるけれども、それらの政策が實施せらるるまでの間何等かの應急策が講ぜらるる必要がある。「適時の一針」は後の大規模なる政策に優るとも劣らぬ價值をもつであらう。

それは必ずしも莫大な經費を要しないであらう。僅かな努力と僅かな費用によつても、戦争による人口の損傷を最小限に喰止むることは不可能ではない。良いと思はれ、そして實行の可能性あるものは、如何に些細なことでも熱心に實行しなくてはならない。之等の小さい努力は積り積つて非常に大きな結果を惹起するであらう。その際最も必要なことは、可及的早期に對策が採られることである。

然らば戦時應急策として如何なる方策がとらるべきであらうか。かかる手段發見の前提として、先づ戦時人口現象が解明されなくてはならない。戦時人口現象の理解に従つて自ら應急策のあるべき方向が與へられるであらう。

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

らう。

(二) 婚姻及び離婚

(イ) 婚姻數

戦時に於ては所謂戦時婚姻として一時的に婚姻數の増加を見る事がある。かかる現象は日支事變勃發當時の我國についても認められた處である。昭和十年乃至昭和十三年の我國婚姻數を四半季別に示せば次表の如くである。

	第一四半季	第二四半季	第三四半季	第四四半季	合 計
昭和 十年	一六三、二四九	一三三、二七	一八、六三〇	一四、七三四	五五六、七三〇
十一年	一五九、七〇九	一三八、〇一一	一一、七四一	一三九、六五五	五四九、一六六
十二年	一七二、〇一九	一三九、八一九	二〇六、四二五	一五六、二三七	六七四、五〇〇
十三年	一四九、三三四	一三二、七六一	一一五、二〇九	一三一、五二七	五三八、八三一

右に見らるる通り、昭和十二年の婚姻數は過去二箇年に比して著しき増加を示してゐる。更に昭和十、十一年に於ける婚姻數は第一四半季に於て最大數を示し、之に次いで第四四半季が多く、之に續いて第二、第三四半季の順で婚姻數の減少を示してゐる。

かかる現象は我國農民の婚姻が農閑期を選んで行はれてゐる事實を反映せるものであらう。

然るに右の如き婚姻數の氣節的順位は昭和十二年に於て變調を來し、日支事變の勃發した七月を含む第三四半季に於て婚姻數は最大數を示し、前年同季の一、一、七、四一に對し二〇六、四二五と激甚なる増加振りを示した。昭和十二年の第四四半季に於ても戦時婚姻の影響は認め得べく、前年及び前々年同季に比し稍、大なる婚姻數を示してゐる。

然るに昭和十三年に於ては、婚姻數は五三、八三一と過去三箇年に比し可成りの減少となつてゐる。また之を四半季別に觀ても昭和十三年の婚

姻數は有ゆる四半季を通じ前年よりも著しい減少を示してゐる。

更に婚姻の四半季別順位も略、正常状態に戻つてゐる。ただ第一と第四の四半季の順位が入れ代つてゐるが、然し其の實數の差は極めて僅少である。

昭和十二年の第三四半季に於ける婚姻の激増は從來事實上の婚姻生活を送つてゐたものが、夫の出征に際し、或は將來召集さるべきことを豫期して、茲に改めて婚姻の届出をなした事に基因するものと考へられてゐる。

後に述ぶる如く歐洲大戰勃發の年たる一九一四年に於ける獨逸の婚姻數は、戰時婚姻にも拘らず増加せずして却つて減少したのである。然しながら婚姻は地方の特殊事情に基づき、地域的特性を有するものであつて、試みにベルリン市の婚姻數を觀るに、茲に於ては開戰の月に該當する八月の戰時婚姻激増に基づき一九一四年には相當の婚姻増加を示したのである。

ベルリン市の婚姻數	一九一三	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
中間人口千につ	二一、五四	三三、七〇	一六、六三	一三、九七	一四、三三	一六、一七
き	一〇・八	二・九	八・五	七・七	八・三	九・三

右の表に見らるる通り、ベルリン市の婚姻數は一九一四年に若干の増加を示したる後一五年一六年と引續き減少し、一九一七年には再び僅かながら増加し、一九一八年には戰前には及ばないけれども相當の婚姻増加が見られたのである。一九一八年に於ける婚姻増加は其の年の末に始まつた兵員の除隊に基因するものと考へられてゐる。其の後一九一九年一月一日より同年四月二十六日までのベルリン市の婚姻數は七、四七一にして前年同期間の四、四六一に比して極めて顯著な増加を示した。

之等の婚姻は、住宅、家具調度、下男下女を嫁入道具として持參するといふ單純な根據から非常に多くの寡婦や離別せる女子との婚姻が行はれたためであると謂はれてゐる。之等の女子は通例高年齢者であるから出生には餘り貢獻しないものと考へられる。それは兎も角、戦後の經濟的荒廢と道德水準の低下を示唆するものとして注目すべき現象である。

さて戰時に於ては多數の婚姻適齡男子が出征し、従つて之等の者の婚姻は全く問題にならなくなつた。又召集を豫想せる男子は婚姻を延期する場合が多いであらう。

更に女子の側に於ても、男子勞働者に代つて女子が産業活動に従事することが戰爭の進行と共に愈々激化し、この關係から婚姻は延期されること少くないであらう。この外住宅、物資、物價等の側面からも婚姻は兎角阻害される傾向があるであらう。

斯の如き事情の下に、戰時に於ては原則として婚姻數は減少するものと考ふべきであらう。

一九一三年より一九一四年にかけて獨逸の婚姻數は一割強の減少を示した。

尤も婚姻を夫婦の婚姻前の配偶關係別に分つて觀察すれば、ある種の婚姻は増加を示す場合もあるのであつて、例へば一九一四年には婚姻は一般に減少した事は先に述べた通りであるが、離婚者を相手とする婚姻は寧ろ増加したと謂はれてゐる。然しこの理由については知る事を得ない。かかる婚姻は婚姻當事者が比較的高齡である結果として出生に對しては意義が少いであらう。

大戰の前年より休戰の年に至るまでの獨逸及び歐洲交戰國の婚姻數を示せば次表の通りである。

獨逸	1913	1914	1915	1916	1917	1918
(金エルザスロー トリングゲン)	523,000	520,000	518,100	519,100	523,900	529,000
佛蘭西	379,000	368,000	375,100	381,100	384,000	378,300
(七十七縣)	264,100	255,100	257,000	260,000	266,000	267,100
伊太利	547,000	547,000	547,000	547,000	547,000	547,000
白耳義	376,000	376,000	376,000	376,000	376,000	376,000
大ブリテン及ビ アイルランド	342,000	342,000	342,000	342,000	342,000	342,000

之によつて見るに、一般に戦時に於ける婚姻数は一九一三年に比し著しく少なかつた。

但し英國のみは例外をなしてゐる。英國に於ける一九一四年より一九一五年にかけての顯著な婚姻増加は、一九一五年に四十一歳までの未婚男子に對し兵役義務が課されることとなり、それが婚姻に對する刺戟として役立つためであると解されてゐる。尤もその増加は極めて短期間見られたのみであつて、人口千についての英國の婚姻率は一九一三年七・八、一九一四年八・〇、一九一五年九・八、一九一六年七・七であつた。

伊太利は英國と異なり一九一五年に國民徴兵制度が布かれ、その結果婚姻率は一九一五年以後は非常に減少した。婚姻数は伊太利を別とすれば、一九一五、一九一六年に最低に達した。戦争後期特に一九一八年には平時には遙かに及ばないが、とにかく婚姻は再増を示してゐる。一九一八年に於ける婚姻増加は恐らく最後の數箇月に於て既に動員解除が開始されてゐたことに基くものと見られてゐる。戦時中に於ける婚姻の状態を總括的に見るために一九一五—一八年を全體として戦前に比較すれば次表の如き結果を得る。

獨逸	1913	1914	増(減)	1915—1918に對する平均
(金エルザスロー トリングゲン)	523,000	520,000	-3,000	518,100

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

佛蘭西	379,000	368,000	375,100	381,100	384,000	378,300
(七十七縣)	264,100	255,100	257,000	260,000	266,000	267,100
伊太利	547,000	547,000	547,000	547,000	547,000	547,000
白耳義	376,000	376,000	376,000	376,000	376,000	376,000
大ブリテン及ビ アイルランド	342,000	342,000	342,000	342,000	342,000	342,000

伊太利については一九一七、八年の數字は被占領地域の婚姻を含んでゐない。従つて實際の婚姻数は本表に示されてゐるよりは若干多い筈であるが、しかし相違は極めて僅少であると見られてゐる。

右表によつて見るに戦時中の婚姻は各國とも四〇—五〇%の減退を示した。但し英國のみは例外にして戦時中婚姻は僅少ながら却つて増加したのである。英國の人口が大戦によつて影響されること至つて少かつたことを知り得るのである。

英國と獨逸に於ける右の相違を一層明瞭に示すために第二十世紀初期以降の兩國の婚姻数の消長を四年平均として示せば次表の如くである。

獨逸	1902	1906	1910	1914	1915
大ブリテン及ビ アイルランド	100,500	100,900	111,300	119,400	111,800

之によつて見るに英國の戦時に於ける婚姻状態が極めて良好であつたことは一目瞭然であらう。かかる好ましき状態は後に述ぶる如く、單に婚姻のみに止らず、出生、死亡についても見らるる處である。反之獨逸の人口は單に婚姻のみでなく出生の上にも死亡の上にも深刻な傷害を受けたのである。

大戰直後婚姻数は各交戦國とも躍進的增加を示した。獨逸については領

域變更のために正確な比較は不可能ではあるが、しかし一九一九年に於ては西部及び東部の割讓地帯を除外した獨逸領土に於て八四二、八〇〇の婚姻が行はれた。一方一九一三年の全國の數字は僅かに五二三、三〇〇に過ぎなかつたのである。領域の縮少も考慮して計算するならば婚姻増加は實に七五%に及んでゐるのである。

獨逸以外の歐洲主交戰國の戦後婚姻は次表の如くであつて孰れも著しい増加を示してゐる。

	一九一三	一九一九	増加率
白 耳 義	六一、一〇〇	九七、一〇〇	五九・〇%
佛 蘭 西	二四七、九〇〇	四四七、〇〇〇	八〇・三
(七十七縣)			
伊 太 利	二六四、二〇〇	三二四、一〇〇	一八・九
大ブリテン及ビ	三四二、四〇〇	四四〇、七〇〇	二八・七
アイルランド			

右の如く之等の交戰國の戦後の婚姻は平時の數字を凌駕してゐるのである。

戦争によつて數多くの未婚青年が戦死せることを考へるならば、『二年三年の年月を散兵濠の内て暮した人々が、如何に家族の建設に熱情を募らせてゐたかといふ事』(ツアーン)を知り得るのである。

かかる婚姻の激増によつて戦時に失はれた出生が多少とも償はれるであらうといふ事は眞に自然の妙といふべきである。

戦時中英自治領の婚姻數も平時に比して一割内外の減少を示した。英自治領に於ける死亡者が歐洲交戰國に比し非常に輕微であつた事を考へれば、戦争が之等の諸國の婚姻に及ぼせる影響は意外に大であつたと謂はなければならぬ。反之日本に於ては状態は全く正常であつた。

英自治領及び日本の戦時中の婚姻は次表の通りである。

	一九一三	一九一四	一九一五	一九一三ニ對スル増(+)減(-)
露 洲	一九一三	一九一四	一九一五	一八
ニュージール	四一、六〇〇	四三、三〇〇	三八、一〇〇	八・四%
ド	八、八〇〇	九、三〇〇	七、七〇〇	二・五
カ ナ	七、八〇〇	六、五〇〇	六、四〇〇	一四・五
日 本	四三一、三〇〇	四五二、九〇〇	四五六、八〇〇	(+) 五・九

1) カナダノ數字ハ人口ノ八七%ニ付テノ部分報告ニヨリ計算。

歐洲中立國の婚姻數を序に掲げて置かう。

	一九一三	一九一四	一九一五	一九一三ニ對スル増(+)減(-)
デンマーク	二〇、五〇〇	一九、八〇〇	二一、〇〇〇	
フィンランド	一八、九〇〇	一八、四〇〇	一八、〇〇〇	
オランダ	四七、九〇〇	四二、三〇〇	四七、一〇〇	
ノルウェー	一五、三〇〇	一五、八〇〇	一七、八〇〇	
スウェーデン	三三、三〇〇	三三、八〇〇	三五、六〇〇	
ス イ ス	二六、八〇〇	二二、二〇〇	二二、八〇〇	
ス ペ イ ン	一三七、六〇〇	一三三、七〇〇	一三七、一〇〇	

右によつて知り得る通り、歐洲中立國に於ける戦時中の婚姻はデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの如く増加せる國もあり、又フィンランド、オランダ、スイスの如く減少せる國もある。然し一九一三年に對する増減は著しくはない。尤もノルウェーの婚姻増加は一六・三%と可成り著しい増加である。一方スイスに於ては逆に一五%も減少を示してゐる。

(ロ) 大戦前後の婚姻年齢

一九一三年の獨逸に於ける平均婚姻年齢は男子は二八・九歳、女子は二五・七歳であつた。之を初婚者のみについて見れば、男子は二七・五歳、女子は二四・七歳であつた。

平均婚姻年齢は平時に於ては殆ど全く變化が無かつたのであつて、一九

○一年に於ても平均婚姻年齢は男子二八・九歳、女子二五・八歳であつた。然るに戦争の結果婚姻年齢は上昇したのである。

戦時中の婚姻年齢を示せば次表の如くである。

初婚者平均婚姻年齢(歳)

	一九一四	一九一七	一九一八	一九一九
男	二七・四	二八・一	二八・七	二九・〇
女	二四・七	二五・四	二五・八	二六・一
平均婚姻年齢(歳)	一九一四	一九一七	一九一八	一九一九
男	二八・九	三〇・三	三二・二	三〇・八
女	二五・七	二六・六	二七・一	二七・三

右に見らるる如く、男子の平均婚姻年齢は戦争の進行と共に漸次高まり、一九一三年の二八・九歳は一九一八年には三一・二歳に高まつた。一九一九年には僅かな低下を來し三〇・八歳となつた。女子の平均婚姻年齢も男子と同様な變化を示してゐる。即ち一九一三年に二五・七歳なりし女子平均婚姻年齢は一九一八年には二七・一歳に高まつた。一九一九年の女子平均婚姻年齢は男子と異なり、僅かながら上昇し二七・三歳となつた。

一九一四年と一九一八年とを比較すれば、この四箇年間に於て男子の婚姻年齢は二・三歳、女子は一・四年高まつたのである。その結果として従來三・二歳に安定してゐた夫婦の年齢差は多少高められて一九一八年には二・七歳となつた。

右の如き女子の婚姻年齢上昇は結婚延期を示すものであり、男子のより大なる婚姻年齢上昇は戦争で多數の若い未婚男子が戦死し、比較的高年齢の男子が結婚するといふ事實によつて説明されてゐる。

婚姻年齢の遅延は又年齢及び年齢階級別婚姻数によつても明白に示され

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

てゐる。

即ち戦前に於ては男子婚姻者の七一・二%は二〇——三〇歳の年齢階級に屬するものであつた。然るに一九一八年には、之の年齢階級に屬するものは僅かに五六・七%に過ぎなくなつたのである。換言すれば一九一三年に於ては、三〇歳以上で結婚せる者は二八・二%に過ぎなかつたのであるが、之が一九一九年には四二・二%に増加したのである。

戦争には参加しなかつた二〇歳以下の男子の婚姻は一九一九年には一・%で一九一三年の〇・六%に比すれば、率としては非常な増加であるが、婚姻の實數といふ見地よりすれば、此の年齢階級の男子の婚姻は問題にならない。

又戦前に於ては女子婚姻者の五八・六%は二五歳以下の者であつて、二五歳以上の者は四一・四%に過ぎなかつた。然るに一九一九年には二五歳以下の者は僅かに四二・三%にして、二五歳以上の者は五七・七%と殆ど六割近くに増加したのである。

男子については五〇歳以上、女子については四五歳以上の高年齢階級に於ける婚姻の割合は戦前戦後とも殆ど同一である。

夫婦年齢組合せの分布状態も戦時中非常な變化を受けてゐる。即ち一九一三年に於ては二四歳男子と二二歳女子との間に結ばれた婚姻数が最大であつた。然るに大戦中、其の最大値は高年齢の方に移動したのである。

即ち一九一七年に於ても一九一九年に於ても最大の婚姻数を示したのは二五歳男子と二三歳女子との間に於てであつた。しかも此の最大値の全婚姻數に對する割合も變化したのである。一九一三年には全婚姻の六十分の一は二四歳男子と二二歳女子との結婚であつた。

しかるに一九一七年には最大値は二五歳男子と二三歳女子の間に示され

たのみでなく、この最大値も全婚姻の七十分の一を占むるに過ぎなかつたのである。しかも一九一九年には此の最大値は九十分の一に低下したのである。

夫婦の平均年齢差は先にも一言述べた如く戦時中に三・二歳より三・七歳に高まつたのである。この年齢差は夫婦の婚姻年齢によつて非常な相違を示してゐるものであるが此處では詳論しない。此の點に關しては本稿末尾に参考文献を示して置いたから、それについて参照されたい。

之を要するに戦時及び戦後に於て婚姻年齢が如何に變化するかについては獨逸のみでなく、他の總ての交戦國についても調査すると共に、婚姻年齢上昇については戦争以外の因子についても考慮する必要があるであらう。

然し戦争そのものが男女の婚姻年齢を高むる作用を有する事は疑ひ無い。多數の青年の死亡(戦死者の年齢及び配偶關係については死亡の章に於て述べる)、女子の職業活動の強化、一般經濟状態といふものだけを取つて見ても戦時並に戦後に於て何等かの程度に於て婚姻年齢の上昇することが豫想されるのである。

従つて戦時並に戦後に於ける婚姻年齢上昇の傾向を完全に防止するのみでなく、尙その上、婚姻年齢を積極的に引下ぐるためには、いよいよ以てそれ相當の措置を講ずる必要があるであらう。

(六) 離婚

本世紀初期より第一次大戦まで離婚數並に人口十萬當りの離婚率は漸増したのである。一九〇三年に於ける獨逸の離婚數は僅かに九・九三三に過ぎなかつたが一九一三年には一七・八三五へと激増したのである。人口十萬につき之を見ると、一九〇三年に一六・九であつた離婚率は一九一三年

には二六・六に達したのである。かかる離婚率の上昇については、人口數の増加よりも夫婦數増加が顯著であつたといふことも一原因として擧げなければならぬが、根本的な原因は婚姻解消の傾向が著しくなつたといふことにあると考へられてゐる。

戦時第一年たる一九一四年には離婚數は從來の水準を維持したが、それ以後は急激に減少し、一九一五年には一〇、七七二(人口十萬につき一五・九)、一九一六年には一〇、四九四(一五・五)、一九一七年には(エルザス・ロートリンゲンを含まず)一一、六〇三(一七・七)であつた。一九一八年には離婚數は再び増加を示し一三、三四四(二〇・六)、一九一九年には異常な増加を示し二一、〇二二(三六・二)と云ふ驚くべき數字を示した。

大戦前後の離婚率(人口十萬につき)を示せば次表の如くである。

一九〇一—〇五	一九〇六—〇八	一九〇九—一二	一九一三—一四	一九一五—一七	一九一八	一九一九
一七・九	二〇・三	二三・三	二六・一	一六・三	二〇・六	三六・二

戦時中離婚數が少なかつた事は、多くの夫の死亡による夫婦數の減少と大部分の夫が妻から遠く離れてゐる事によつて説明されてゐる。

然し戦後一九一九年の離婚増加は夫の歸還及び婚姻増加による同棲夫婦數の増加のみによつて説明することは出来ないと言張されてゐる。

眞の原因は特殊の離婚統計即ち事由別離婚統計によらざれば分明しないであらう。我國に於ては裁判上の離婚については此種の統計は存在するも、獨逸には此の種の資料は存しない様に思はれる。従つて現在の處大戦後の離婚激増については、正確な解釋を下すことは不可能であらう。然し筆者の想像にして誤り無しとすれば、かかる離婚激増と道德殊に性道德の水準低下との間に何等かの關聯がありさうに思はれる。戦時並に戦後の經濟的荒廢及び政治的混亂は兎角人心を荒ばしめたであらうと考へられる。

一九一九年一月より四月にかけてベルリン市の婚姻数が異常な増加を示したことは先にも述べた通りであるが、之等の婚姻増加は、所謂持参金（住宅、家具調度、下男下女）付きの寡婦或は離別女子との婚姻が多數に上つたためであると謂はれてゐる。一方一九一九年には離婚は非常に増加したのであるから之等の事情を顧慮すれば婚姻の異常な増加と離婚の激増の間に因果關係の存在を假定することは不合理ではないであらう。

(三) 出生

戦時に於ける出生減退は主として召集による夫の不在に基因するものである。従つて戦時出生減退は開戦後略、九箇月にして初めて認めらるべきものである。事實一九一四年八月に参戦した國に於ては一九一四年に於ても、また一九一五年の第一四半季に於ても著しき出生減退は認め得ないものである。

例へば獨逸の一九一四、一五年の四半季別出生を示せば次の通りである。

	第一四半季	第二四半季
一九一四	四七二、五〇〇	四六三、八〇〇
一九一五	四七六、五〇〇	三五三、四〇〇

之によつて知らるる通り、一九一五年第一四半季の出生數は前年同季に比し寧ろ増加さへ示してゐる。然るに一九一五年の第二四半季には顯著なる出生減退が現はれてゐるのである。右の如き關係は獨逸以外の諸國に於ても見らるる所であつて、一九一五年第二四半季の出生數を前年同季に比較すれば、獨逸は二四%減、奧太利（十一帝室直轄領）は二五・五%減、佛蘭西（十三都市）は三七%減、大ブリテン及びアイルランドは五・五%減となつてゐる。之等の數字は戦時出生減退が如何に動員の規模によつて左右せ

らるるものであるかを物語つてゐるものである。

即ち獨逸佛の三國は等しく大戰初期より數百萬の動員を行つたのであるが、之等の三國に於ては一九一五年第二四半季の前年同季に對する出生減退は二四%以上に達したのである。然るに英國に於ては出生減退は僅かに六%にしか達しなかつたのである。之は英國に於ては比較的少數の雇兵が使用されたためである。聯合王國の内アイルランドのみについて見れば出生減退は僅かに一・七%にして、即ち此處では動員に殆ど全く無關係であつたのである。英國植民地に於ける兵力の擴充は本國よりも後れ、従つて其處では戦争の影響は極めて輕微であつた。伊太利は他の列強よりも九箇月後れて参戦したといふ特殊事情があり、従つて一九一四、一五年の出生數が常態を示したことは當然であらう。伊太利の出生數は一九一三年には一、二二二、五〇〇、一九一四年には一、一一四、一〇〇、一九一五年には一、一〇九、二〇〇であつた。之によつて見るに出生減退は極めて輕微であつて従つて全然自然的な減少と認むべきものである。

再び日支事變勃發當時に於ける我國の出生狀態の變化を見るに全く定型である。昭和一二年及び一三年の四半季別出生數を示せば次表の如くである。

	第一四半季	第二四半季	第三四半季	第四四半季	合計
昭和十二年	七〇八、九四〇	四四九、六四八	四八九、六六九	五三二、二七七	二、一八〇、七三四
昭和十三年	六八五、〇三六	四〇八、二二四	四二二、二四二	四三三、九三〇	一、九二八、三三二
昭和十三年、前年同季ニ對スル減少	二、三九〇	四、四三四	七、七七八	一〇、九三四七	二五、四二三

日支事變の勃發は昭和十二年の七月であるから、事變の影響が出生の上に見れるのは早くとも昭和十三年の四月以後でなければならぬ。右に示した表によつて昭和十三年に於ける各四半期を前年同季に比較すれば、出生

減退は昭和十三年の第二四半季より始まつてゐる事は疑ひない。何となれば第一四半季の減退率は僅か三・四%に過ぎないのに第二四半季の減退は九・一%へと激増し第三四半季以後に於ては出生減退は更に甚だしく、第三四半季は一五・九%、第四四半季は二〇・五%の減退を示してゐるからである。

以上述べた如く戦争は夫婦の隔離といふ結果を通じて、國民の再生産の上に深刻なる影響を與ふるものであり、また國民の再生産の阻害される程度は動員の規模によつて左右せらるるものであることは極めて明白に認め得る處である。

然しながら戦時の出生減退はこの因子のみによつて説明し得るものではない。

周知の如く獨逸は聯合國側でつた經濟封鎖戰術のために食糧の確保について大いに悩まされたのである。食糧難によつて國民の榮養状態は悪化し、ために疾病に對する市民の抵抗力が弱められ、従つて市民死亡數が著しく増加したのであるが、之の點については死亡を取扱ふ章で述べることとし、此處では食糧難と出生の關係について述べよう。

第一次大戦中に於て女子の生殖機能に種々の障害が現れたといふ事については産婦人科醫によつて多くの報告がなされてゐるのである。例へば所謂戦時無月經 *Kriegsamenorrhoe* と稱し、從來月經正順にして、且生殖器に何等の器質的變化を認めざる機能性無月經が漸増したといはれてゐる。又性慾減退を訴ふるものも戦時中増加を示したといはれてゐる。生殖機能の障害は單に女子のみに限られず男子についても現はれたといふ事である。之等の原因については、榮養障碍、身體過勞、精神的打撃、性生活の變化等が擧げられ、必ずしも意見は一致してゐない様であるが、榮養上の缺陷

が之と密接な關係を有してゐるといふ見解が相當多いやうに考へられる。然し出生減退を榮養の不足によつて或程度説明し得るとしても、之に餘りに大なる價值を置くことは出來ないであらう。

一方出生は人間の意志を通じて、或程度有意的に支配されるものであり。又現にそいふ努力が拂はれたことも周知の通りである。

今此の點の考察の手段として試みに戦時中に於けるベルリン市の公生出數を示せば次の通りである。

公生出生 一九一三 一九一四 一九一五 一九一六 一九一七 一九一八
 三、三三五 二九、〇二〇 二四、二二三 一七、四三二 一四、六六四 一五、九五二

右の内第一子出生は次の通りである。

第一子出生 一九一三 一九一四 一九一五 一九一六 一九一七 一九一八
 一、二、四九七 一、〇七三六 八、〇五〇 五、七六六 五、二八七 六、五六一
 公生出生に對スル割合 三六・七〇 三六・九九 三三・三七 三三・〇八 三六・〇五 四一・二三

さて婚姻を取扱つた章に於て戦時中に於けるベルリン市の婚姻が如何なる變化を來したかを示して置いた。それによるとベルリン市の婚姻數は一九一三年の二二、一九四より一六年の二三、九六三へと低下したことを知り得る。

即ち同市の婚姻數は一九一六年までに三三・八%の減少を來したことになる。一九一七年以後に於ては婚姻數は再び増加を示してゐる。

一方ベルリン市の公生出生數は上の表に示されてゐる通り一九一三年の三一、三二五より一九一七年の一四、六六四へと五三・二%の減退を示してゐる。之によつて見るに出生減退は婚姻減少よりも更に甚だしかつた事を知り得るのである。更に公生出生數に對する第一子出生の割合は上に掲げた表によつて見らるる通り著しい變化は認められない。この事實は第一子

出生が第二子以後の出生と同一歩調を以て減少したことを意味するものであり、しかも婚姻の減退は公生出生数の減退よりも緩慢であつたことを考へ合すれば、かかる現象は無子夫婦の増加と二児制への接近を意味するものであると謂ひ得るであらう。

榮養状態が若い妻に於て特に悪化したといふ事がないとすれば、恐らく右の事實は避妊或は墮胎の増加を意味するものであらう。従つて大戦時に於ける出生減退には意識的出産制限が原因をなしてゐるものと謂ひ得るであらう。更に戦時に於ける婚姻減少が其の後の出生数に影響するであらうといふことは極めて明白である。

再びベルリン市の出生について、婚姻との關聯に於て若干の觀察を下して見よう。

一九一三年より一九一八年に至るベルリン市の出生数は次表の通りである。

ベルリン市 出生數	一九一三	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
中間人口 千ニツキ	四〇、八三三	三七、四九三	三〇、九九三	二七、七〇七	一八、七二五	二〇、一七八
	一九六二	一八四八	一六・五〇	一三・六五	一〇・七三	一一・六五

右の如く、出生の實數について考へれば、一九一七年の出生は戦時中の最少數を示し、一九一三年の半分にも及ばなかつたのである。然るに一九一八年には出生は改善せられ、増加に轉じてゐる。この一九一八年に於ける出生増加には三つの因子が作用してゐると謂はれてゐる。先づ第一に除隊となつた兵士の歸郷であり、第二は失業手當の支給に誘惑された失業者のベルリン市への大流入に基づくものと謂はれてゐる。

然し休戦の成立は一九一八年十一月であるから、休戦後の歸郷者は一九一八年の出生とは無關係の筈である。恐らく一九一七年に於ても、兵員の交替其他によつて動員解除となつたものが相當あつたのであらう。序に獨

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

逸に於ける動員の方法について述べれば、比較的若い者といふ意味で先づ最初に獨身者が召集され、之に次いで比較的高齡者といふ意味に於て有配偶者が召集されたのであるが、然し除隊は之と逆の順で行はれたといふことである。従つて最初の歸郷者は概して有配偶者であると考へられる。このことは戦後の出生に取つて重要な意味を持つものといひ得よう。

右の二つの因子の外に婚姻増加も一部の原因をなしてゐると考へられる。先に婚姻の章に於て述べた如く、一九一六年に最低に達したベルリン市の婚姻は一九一七年には既に恢復に向つてゐるのである。之の婚姻増加が一九一八年の出生増加に關係を有することは疑ひない。尤も婚姻の増加は僅少であつて、これに基づく出生増加は餘りに評價し過ぎてはならないであらう。

婚姻が其の後の出生に關聯して大きな意義を有するといふ點に關して茲に興味ある事實があるので述べよう。

之は戦時中ハンブルグ州についての事例であるが、其處では復活祭、降臨祭、クリスマス等の祭日特に之等の祭日が晴天であつた場合には、其後十箇月經つて出生減退の傾向が一時的に中絶するといふ現象が見られたと謂はれてゐる。例へば屢々絶佳なる五月の月に中る降臨祭に若し太陽が照り輝くならば、十箇月の後に産婆は多忙を極めるといふのである。

さて戦時中の一九一五年の九月から十月までの間に、即ち一九一四年のクリスマス後の十箇月後に於て出生は激増を示した。

又一九一六年と一九一七年の九月から十月までの一箇月に、更に一九一六年の二月（一九一五年の復活祭後十箇月）及び一九一七年の二月にも出生の激増が見られたのであつた。

戦時に於て出生増加の見地より賜暇論及び求婚日論 (Freientagsstheorie)

が採擇せられたといふ事は右の事實に照して考ふる時非常に興味あることである。

Guradze は右の如き賜暇論を辯護して次の如く述べてゐる。「人或は異議を唱へて曰はん、戦時に於ては賜暇は祭日のみ限らるるものに非ずして其の都度の歸休許可に従ふものなり、従つて、賜暇は全體にわたつて平等に與へらるるものなりと。

されど、かかる出生現象の依然として存することは注目すべきなり。右の事實は出生増加の一般的手段として吾人に指示を與ふるものといはざるべからず。賜暇は又平時に於ても又市民的職業にも適用し得べきものにして、忽にせらるべきものに非ず」と。

さて出生増加策としての賜暇は日支事變下の我國に於ても實施されてゐるやに聞及んでゐるが、かかる措置は出生増加の見地のみでなく家族の擁護の上より見ても眞に望ましきことである。戦時に於ては婚姻を増加せしむる上に種々の困難が伴ひがちであらう、従つて今後結ばれる新なる夫婦の出産力以外に既に成立せる夫婦の出産力に期待をかくる事は極めて必要の措置といふべきである。

以上に於て我々は戦争と出生減退との間の一般的な關係について極めて概括的な展望を行つたのであるが、次に我々は第一次世界大戦が各國の出生の上に如何程の影響を與へたかを數量的に觀察しよう。

戦時中に於ける歐洲主交戰國の出生を示せば次の表の如くである。

白 耳 義	一九一三	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
獨 逸	一、五七〇	一、〇九〇	八、七〇〇	七、六五〇	七、四〇〇
(含エルザスロー トリンゲン)	一、八八、八〇〇	一、八二、五〇〇	一、〇三、九〇〇	九三、一八〇	九四、六、七〇〇
佛 蘭 西	一、〇〇、〇〇〇	五、六、〇〇〇	三、三、〇〇〇	四、四、一〇〇	三、九、五〇〇

伊 太 利 一、三三、七〇〇 一、〇三、三〇〇 八、二、〇〇〇 七、三、七〇〇 六、四、八〇〇
 大ブリテン及ビ
 アイルランド 一、〇一、一〇〇 一、〇三、四〇〇 九、六、七〇〇 八、三、三〇〇 八、四、八〇〇
 戦時中の出生減退をより明瞭に表示するために、一九一三年の出生數を一〇〇〇として各年の出生を示せば次表の如くである。

白 耳 義	一九一三	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
獨 逸	一、〇〇〇	七五一	五九八	五二四	五二三
(含エルザスロー トリンゲン)	一、〇〇〇	七五二	五六〇	五〇七	五一五
佛 蘭 西	一、〇〇〇	六四〇	五一八	五六七	六六一
伊 太 利	一、〇〇〇	九八八	七八五	六三六	五七八
大ブリテン及ビ アイルランド	一、〇〇〇	九二九	八九五	七七三	七七〇

之によつて見るに交戰國の出生減退は一般に年と共に激しくなつたと謂ひ得る。一九一七年までは佛蘭西を除き總ての國の出生は減退したのである。ただ佛蘭西に於ては一九一七年の出生は前年の五一八に對し五六七と僅かながら増加を示したのである。之は大戦中佛蘭西が外國人の勞働者と豫備軍を聯合國側から得る事が出來たことに基因するものであるといはれてゐる。

さて各國とも全年を通じて一九一五年の減退率が比較的に著しいのであるが、之は同年の五月から戦争の影響が現れたためである。

次に戦時中の出生減退を總括的に表示するために一九一五—一八八年に於ける年平均出生數を一九一三年に比較すれば次表の如くである。

白耳義	獨 逸	佛蘭西	伊太利 及ビ アイル ランド	大ブリテン
一九一三	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一九一五—一八 平均	五九九	五八三	五九六	七四七
八四二				

之によつて見るに獨逸に於ける一九一五—一八八年の平均出生數は一九一

三年の一〇〇〇に對し五八三である。之に對し大ブリテン及びアイルランドは八四二であつて遙かに良好であつた。伊太利の出生指數は七四七と、獨逸に比して極めて良好であるが、之は伊太利の參戰が一九一五年五月であつたためである。

右の數字を以て戰時中各國が蒙つた出生上の損失の大體の程度は知り得るであらう。然し戰時出生減退は開戦後十箇月目より現れ、休戦後十箇月目にして終結すべきものであつて、其れ以外の期間に於ける出生状態は戰爭そのもの以外の因子と關聯せしむるのが正當である。

かくて出生に及ぼせる戰爭の直接的影響は一九一五年五月に始まり、事實上戰爭行爲を終結せしめた休戦の成立後九箇月の終り即ち一九一九年七月までの五十一箇月に及ぶものと考へなければならぬ。従つて略、一九一九年八月以後の出生は戰後に於ける戰爭の影響として別個の取扱を必要とするのである。

歐洲に於ける主交戰國の戰時五十一箇月間の出生を一箇年平均に換算し、之を一九一三年に比較すれば次表の如き結果を得る。

實 數	比例 數	
	一九一三	戰時五十一箇月間ニ於ケル年平均出生
白 耳 義 (除西フランダール地方)	一五、九〇〇	一、〇〇〇
獨 逸	一八、八〇〇	一、〇〇〇
佛 蘭 西 (七十七縣)	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇
伊 太 利 ¹⁾	一三、三〇〇	一、〇〇〇
大ブリテン及ビアイルランド	一〇、一〇〇	一、〇〇〇

一九一三 五月ヨリ一九一九年七月末マデ 一箇年ニ換算

1) 伊太利ニツイテハ戰時ハ四十二箇月。

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

それ故戰前に比し大戰中五十一箇月間(伊太利は四十二箇月)に於ける年平均出生減退率は次表の通りである。

白 耳 義	約 四三%
獨 逸	四六
佛 蘭 西	四四
伊 太 利	三三
大ブリテン及ビアイルランド	一八

右に見らるる通り戰時中の歐洲主交戰國の出生減退は略、四〇%前後と見ることが出来る。英國の率極めて低い理由の一つは、婚姻の章で述べた如く、一九一五年に四十一歳以下の未婚者に兵役義務が課され、その結果婚姻が激増し、之が再び出生の減退を阻止したからである。従つて之の結果から見れば英國は極めて賢明なる戰時人口政策を採つたといふ事になるのである。

英自治領、日本、合衆國及び歐洲中立國の出生に對する影響は極めて輕微或は皆無である。之等についていちいち數字を擧げるとは省略する。ただ歐洲中立國に於ては、スイス、オランダが比較的強い影響を受けたのであるが、それは之等の國に於ては比較的廣範なる動員が行はれたことに基づくものである。

スイス、オランダの戰時中の出生率(人口千につき)は次の通りである。	
ス イ ス	一九一三 一九一四 一九一五 一九一六 一九一七
オ ラ ン ダ	二四・七 ¹⁾ 二二・四 一九・五 一八・七 一八・二
1) 1908—1913	二八・二 二八・二 二六・二 二六・五 二六・一

戰時中私生兒出生が非常に増加したといふことが謂はれてゐるので此の點について若干述べて置きたい。

さて私生児出生の頻度は如何に表示さるべきかといふことが先づ先決問題である。私生児出生も出生に相違ないのである。それ故全出生中に占むる私生児出生の割合を以て私生児出生の頻度を示すといふ考へが直ちに着想されるのである。

この方法によつて私生児出生の状態を観察すると次の如き結果を得るのである。

尙、戦前、例へば一九二二年をとつて見ると獨逸の私生児出生は全出生一〇〇〇につき九五であつた。一九二三年の率は九七であつた。この方法を以て、一九一四年以後の私生児出生率を示せば次表の通りである。

一九一四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九
九八	一一二	一一一	一一五	一三一	一一二

之によつて見るに大戦中私生児は非常に増加したやうに見える。然し右の計算に用ひた方法は毎年の出生數に著しき變化のない場合にのみ正確な状態を示すものであつて、戦時の如く急激に出生數の減退する場合には不適當である。何となれば私生子出生が増加しない場合に於ても公生児出生が著しく減少するときは私生児出生率は上昇することになるからである。

そこで理想的には、妊孕年齢にある未婚或は無配偶の女子總數との關係に於て私生児出生の消長を見ることが考へられるのである。

然しこの方法が資料の關係上不可能であるならば、妊孕年齢女子人口を以て代用することが出来るであらう。

獨逸に於ける妊孕年齢(一五—五〇)歳女子人口一〇〇〇〇〇人につき、戦時中の公生児、私生児出生は次の通りである。

	一九二三	一九二三	一九二四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九
公 生	一〇三、〇四	九九、五五	六六、四三	七〇、六六	五三、〇三	四六、三三	四四、五二	六四、三〇
私 生	一〇、八八	二〇、六九	二〇、四九	八、五五	六、四八	六、〇三	六、六六	八、〇七

右の如く戦時に於ては私生児出生もまた公生児と同じく減少したのである。若し假りに無配偶女子を基準として計算したとすれば、私生子出生減退は一層著しいであらう。何となれば戦時に於ける無配偶(未婚、死別、離別)女子は婚姻中絶のため、戦前に比して多數であつたからである。

之を以て見るに戦時中私生子は増加したとは謂ひ得ないのである。然しながらかかる現象が戦時に於ける國民精神の緊張によるものであるか、或はまた避妊或は墮胎がより廣く行はるるに至つた結果であるかは詳細なる研究の結果をまたざれば、何れとも斷定を下し得ない。

後に死亡を取扱ふ章に於て述べる如く、大戦中自殺による死亡が減少したといふ事實を顧慮せば、大戦前期に於ける私生児出生の減少は或程度國民精神の緊張の結果であると考へることが出来るであらう。

(四) 戦闘員の死亡

(イ) 戦傷病死數

戦争は多くの國々の非戦闘員の死亡を高めた事は後に述べる通りであるが、之等の死亡は直接的な戦死に比すれば遙かに及ばないのである。

戦傷病死は激甚なる出生減退と共に交戦國の人口運動に非常な悪影響を與へたのである。

戦死者は最も活力あり、又國民經濟にとつて最も重要な年齢階級に屬するものであるから、之等の死亡が民族力に與へた損害は愈、重大である。

大戦中動員された人員總數は七千五百萬と推定されてゐる。この七千五百萬の内三千萬は大戦末期に戦争を遂行しつゝあつた軍隊を形成してゐる。

た。この兵力は動員数よりも著しく少ないのであるが、それは世界大戦末期に露西亞が交戦國の列から脱落したためである。

獨逸の動員数は千三百二十五萬であつて、又戦争末期の兵力は八百萬であつた。

一九一八年三月二十一日に西部攻撃が始まつたときには下士及び兵卒三百五十萬、將校十四萬といふ最大兵力が配備された。

戦死は近代武器の恐るべき威力のために異常な多數に達した。交戦國軍隊の總死亡数は一千萬に達し、負傷者は恐らく二千萬と三千萬の間であらうと推定されてゐる。戦死数については死亡を計算する根據となる資料の相違に従て發表された數字には相當の懸隔があつて孰れが最も眞實に近いかにについては各國について特別の研究を必要とする。しかしここではデーリングの數字と「經濟と統計」誌の二つの數字を併記して置かう。之によつて大體の状態は知り得るであらう。

デーリングによれば交戦諸國の戦死總数は次の如くである。尙實數と共に一九一四年の總人口千當り及び二〇一四五歳男子人口千當りの比例が示されてゐるから、之によつて各國民族力に對する戦死の意義を知り得るであらう。

	戦死者數	一九一四年總人口千ニツキ	二〇一四五歳人口千ニツキ
白 耳 義	三四、〇〇〇	四・四	二五
獨 逸	一、八〇九、〇〇〇	二六・七	一四九
埃 太 利	八一、〇〇〇	二七・七	一六六
ハンガリー	六四五、〇〇〇	三〇・一	一八七
佛 蘭 西	一、三三五、〇〇〇	三三・四	一八二
伊 太 利	五六三、〇〇〇	一五・七	一〇一
大ブリテン及ビ アイルランド	七四四、〇〇〇	一六・一	八八

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

洲	戰 死	負 傷
獨 逸	一、八二四、〇五一	四、二四七、一〇五
佛 蘭 西	一、三五八、八七二	二、五六〇、〇〇〇
英 國	七四三、七〇二	一、六九三、二六二
伊 太 利	二〇二、三二一	四二八、六四四
白 耳 義	四九六、九二一	九九九、五七六
セルビア	一一五、〇〇〇	—
合 衆 國	六九〇、〇〇〇	—
カ ナ ダ	五七、〇〇〇	—
ド ニー ジー ラ ン	一六、〇〇〇	—
合 計	六、〇六四、〇〇〇	—
概數。	一三・二	一三・三

之によつて見るに死亡率は佛蘭西及び中歐諸國に於て最も高い事を知るのである。之等の國に於ては兵役義務年齢にある男子一〇〇の内約一五一人は戦争の犠牲となつてゐるのである。

白耳義の率が極めて低い事が目立つ。これは大戦初期に於て白耳義の大部分が占領され、従つて聯合國側は白耳義を兵員補充地域として利用出来なかつたためであると謂はれてゐる。伊太利及び英國主權下國家に於ける戦死は獨逸其他に比して非常に僅少である。

伊太利の戦死の比較的僅少であつた事は同國の參戰が一九一五年五月であつたことによつて説明し得る。

英自治領の如く戦争にそれ程國力を傾けなかつた國の戦死が人口に比して極めて著しいといふことは意外である。

次に「經濟と統計」誌によつて見ると戦死傷は次の如くである。

國	戰 死	負 傷
獨 逸	一、八二四、〇五一	四、二四七、一〇五
佛 蘭 西	一、三五八、八七二	二、五六〇、〇〇〇
英 國	七四三、七〇二	一、六九三、二六二
伊 太 利	二〇二、三二一	四二八、六四四
白 耳 義	四九六、九二一	九九九、五七六
セルビア	一一五、〇〇〇	—
合 衆 國	六九〇、〇〇〇	—
カ ナ ダ	五七、〇〇〇	—
ド ニー ジー ラ ン	一六、〇〇〇	—
合 計	六、〇六四、〇〇〇	—
概數。	一三・二	一三・三

戦死傷は全交戦年にわたつて平等に生ずるものでなくて、戦況の停滞せる時期には少く、活況を呈せる時期に多數となるのは謂ふまでもない。世界大戦中戦死傷の最も多かつたのは戦争初期と一九一八年春の西部戦の行はれた時であつた。佛蘭西軍隊はこの時以外にベルダン戦に非常な被害を受けた。英軍はソンム戦、アルラス戦、カンブライ戦及び一九一八年晩夏の聯合國總攻撃に特に大なる損害を受けた。

獨逸竝に英佛の損害については相當詳細な數字が發表されてゐるが餘りに特殊となるので、茲では述べなす。之等の數字については *Wirtschaft und Statistik 2. Jahrg. No. 13/14, Die Kriegsheere und ihre Verlust im Weltkrieg* を参照されたす。

獨逸の戦死の内陸軍の戦死は約百七十九萬、海軍の死亡は三四、三五四、空軍の死亡四、一〇五である。

(ロ) 戦死者の年齢、配偶關係

先にも述べた如く兵員の死亡數はその計算の方法の異なるに従つて、發表數に多少の相違が存するのである。獨逸戶籍簿の示す處によれば一九一四——一九一九年の間に於ける兵員の死亡は、一、六九一、八四一¹⁾である。之を年次別に示せば次の如くである。

1) 一九三二三ノ死亡追加届出アリタルモ年齢配偶關係不明デアル。尙コノ外外國ニアル兵員ノ死亡一六九九ガ届出デラレタ

更に一九一四——一九一九年の兵員の年齢別死亡數を示せば次表の如くである。

一九一四	二四一、三四三	二六	一五九	〇・〇一
一九一五	四三四、〇三四	二七	一五八	〇・〇一
一九一六	三四〇、四六八	二八	一五七	〇・〇一
一九一七	二八一、九〇五	二九	一五六	〇・〇一
一九一八	三七九、七七七	三〇	一五五	〇・〇一
一九一九	一四、三一四	三一	一五四	〇・〇一
		三二	一五三	〇・〇一
		三三	一五二	〇・〇一
		三四	一五一	〇・〇一
		三五	一五〇	〇・〇一
		三六	一四九	〇・〇一
		三七	一四八	〇・〇一
		三八	一四七	〇・〇一
		三九	一四六	〇・〇一
		四〇	一四五	〇・〇一
		四一	一四四	〇・〇一
		四二	一四三	〇・〇一
		四三	一四二	〇・〇一
		四四	一四一	〇・〇一
		四五	一四〇	〇・〇一
		四六	一三九	〇・〇一
		四七	一三八	〇・〇一
		四八	一三七	〇・〇一
		四九	一三六	〇・〇一
		五〇	一三五	〇・〇一
		五一	一三四	〇・〇一
		五二	一三三	〇・〇一
		五三	一三二	〇・〇一
		五四	一三一	〇・〇一
		五五	一三〇	〇・〇一
		五六	一二九	〇・〇一
		五七	一二八	〇・〇一
		五八	一二七	〇・〇一
		五九	一二六	〇・〇一
		六〇	一二五	〇・〇一
		六一	一二四	〇・〇一
		六二	一二三	〇・〇一
		六三	一二二	〇・〇一
		六四	一二一	〇・〇一
		六五	一二〇	〇・〇一
		六六	一一九	〇・〇一
		六七	一一八	〇・〇一
		六八	一一七	〇・〇一
		六九	一一六	〇・〇一
		七〇	一一五	〇・〇一
		七一	一一四	〇・〇一
		七二	一一三	〇・〇一
		七三	一一二	〇・〇一
		七四	一一一	〇・〇一
		七五	一一〇	〇・〇一
		七六	一〇九	〇・〇一
		七七	一〇八	〇・〇一
		七八	一〇七	〇・〇一
		七九	一〇六	〇・〇一
		八〇	一〇五	〇・〇一
		八一	一〇四	〇・〇一
		八二	一〇三	〇・〇一
		八三	一〇二	〇・〇一
		八四	一〇一	〇・〇一
		八五	一〇〇	〇・〇一
		八六	九九	〇・〇一
		八七	九八	〇・〇一
		八八	九七	〇・〇一
		八九	九六	〇・〇一
		九〇	九五	〇・〇一
		九一	九四	〇・〇一
		九二	九三	〇・〇一
		九三	九二	〇・〇一
		九四	九一	〇・〇一
		九五	九〇	〇・〇一
		九六	八九	〇・〇一
		九七	八八	〇・〇一
		九八	八七	〇・〇一
		九九	八六	〇・〇一
		一〇〇	八五	〇・〇一

四三—四四	九、四五四	〇・五六
四四—四五	七、八三四	〇・四六
四五—五〇	一四、五一〇	〇・八六
五〇—五五	一、二九二	〇・〇八
五五—六〇	七三四	〇・〇四
六〇以上	五〇〇	〇・〇三
不詳	六九〇	〇・〇四
合計	一、六九一、八四一	一〇〇・〇〇

之によつて見るに死亡の最大部分を占むるものは二〇歳である。二〇—二二歳で死亡せるものは一五八、二六五にして全體の九・三五%を占めてゐる。

一九—二五歳の各歳の死亡割合は次表の通りである。

年齢	一九—二〇	二〇—二一	二一—二二	二二—二三	二三—二四	二四—二五	合計
死亡	六、四六	九、三五	九、二〇	八、一六	七、〇七	六、〇七	四六、三一
割合	二一・三	三三・三	三一・三	二六・一	二四・一	二〇・一	二一・三

さて戦争の進行とともに、若い者の死亡が増加するといふ現象が生じたのである。一九一四年には二三—二四歳の者が總死亡数の最大部分を占めてゐたのであるが、一九一五年以降は次表に見らる通り最大死亡数を示した年齢は漸次低下したのである。

一九一五年	二一—二二歳
一九一六年	二〇—二一歳
一九一七年	二〇—二一歳
一九一八年	一九—二〇歳

戦線の部隊の補充は男子人口の段々若いものによつて行はなければならなくなり、その結果戦争最後の年には一九歳が死亡總数の最大部分を示すに至つたのである。一九乃至二五歳の年次別死亡は次表の通りである。

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

年齢	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九
一九—二〇	五、三〇四	三、九三一	一〇、〇〇〇	三〇、三三六	三六、八三一	二、二三
二〇—二一	九、六三三	九、七六二	六、六三三	三〇、六六五	三六、二七六	一、四八八
二一—二二	一、九〇九	四、八七七	三、五九七	二四、七三三	三三、四九一	一、〇〇六
二二—二三	二、四一七	三、九四四	二、七四三	一九、四四六	二七、〇五九	八、九〇
二三—二四	三、五八六	三、三三一	三、四三三	一五、九〇三	三、五五九	六、三三
二四—二五	三、二六六	二、六六八	一、八九二	一三、五三四	一、九七四	六、四四
一九—二五	一〇、四九三	一、九四三	一六、二七一	一四、六〇六	一、七九七	五、五五
死亡總數	四、五〇	四、七七一	四、七三三	四、七四	四、七三	三、八八
對スル割合	四、五〇	四、七七一	四、七三三	四、七四	四、七三	三、八八

之によつて見るに最大死亡年齢は漸次若年齢の方に移動したけれども、一九—二五歳の死亡割合は減少してゐないのである。但し一九一八年にはこの年齢の死亡割合は低下した。これは戦争最後の年に比較的高齡者の死亡が増加したことを意味するのである。即ち戦線の補充が戦争の進行とともに愈々若い者によつて行はれたと同時に、高年者による補充も漸次強化されたに相違ないのである。

次に戦死者を配偶關係別に示せば次の通りである。

獨身者	一、一六三、一九九	六八・七五%
有配偶者	五、一八、三五一	三〇・六四%
死別者	七、七七二	〇・四六%
離別者	二、一九一	〇・二三%

獨身者の死亡割合を年次別に示せば、次表の如く漸次増加したのである。

一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九
六四・八四%	六七・〇九	六八・八一	七〇・三二	七二・〇三	六五・三五

プロシヤ	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九
バイエルン	六三・五二	六六・三八	六八・三〇	七〇・五三	七二・五四	六五・八五
ザクセン	六九・〇八	七四・八〇	七七・四一	七五・四二	七三・〇五	七〇・九一
ウエルテム	五八・八五	五八・七一	六〇・三三	五九・八五	六三・七三	五三・八九
ブルグ	七四・二四	七六・八五	七九・二二	七六・四七	七六・〇四	七二・一七
ベルリン	六二・四三	六二・八一	六三・三三	六三・〇〇	六三・九七	五〇・七九

右の如く獨身者死亡の割合はヴエルテムブルグで最大でザクセンで最低である。かかる結果は州の年齢構成及び婚姻慣習の相違等に基づくものといはれてゐる。例へばヴエルテムブルグでは婚姻はザクセンよりも遅れるのが常であつて、例へば一九一三年のザクセンの男子平均初婚年齢は二六・三八歳であるに對しヴエルテムブルグは二八・五一である。

(ハ) 戦死者の死因

大戦勃發より一九一九年までに死亡せる獨逸陸軍兵員數は戶籍簿によれば一、七一、一五四である。

1) 追加届出一九三三ヲ含ミ外國ニアル獨逸兵ノ死亡一六九九ヲ除クこの數を千三百二十五萬と見積られてゐる動員數に對比すれば、動員數一〇〇〇につき總死亡は一二九である。

一方帝國死因統計によれば總死亡數は一、六六七、〇三九(兩メクレンブルグを含む)といふことになつてゐる。かかる相違は如何にして生ずるかといふに戶籍役場及び死亡診斷書によつて死因を調査する機關が如何なる場合にも死亡者の軍事關係を確定し得るといふ譯ではないからであると説明されてゐる。

それはとにかくとして、右の一、六六七、〇三九の總死亡の内約百五十萬(正確には一、四七九、〇六六)即ち總死亡の九割は外因死として掲げられ

てゐる。この死因中には戦死及び戦傷死と共に事故による死亡を含んでゐる。

戶籍役場の報告と帝國死因統計の差違(四四、一一五)——之は殆ど戦死であること疑ひない——を算入すれば、外因死によつて死亡せる兵員は一、五二三、一八一即ち動員數一〇〇〇につき一一四・九に相當する。

之に對し病死せる兵員數は一八二、五五四にして、之に自殺五、一〇六、殺人、撲殺、或は死刑による死亡三二三を算入すれば總死亡は一八七、九七三にして動員數一〇〇〇につき一四・二である。

各年に於ける兵力に對比した戦傷病死の狀況は次の通りである。

推定兵力	死		疾病其他		外因死		合計
	單位千	實數	單位千	實數	單位千	實數	
一九一四	五、〇三〇	二四一	二四五	一四	二七	二三一	四八・七
一九一五	六、七六七	四三四	四三八	三四	五一	四〇四	五九・六
一九一六	七、六三〇	三四一	三四四	二八	三六	三一七	四一・五
一九一七	七、九七七	二八二	二八六	三六	四・六	二四九	三一・五
一九一八	八、〇〇〇	三八〇	三八四	六五	八・一	三一九	三九・八
一九一九	—	一四	一四	一一	—	—	—
追加	—	一九	—	—	—	—	—
合計	—	一、七一一	一、七一一	一八八	—	一、五二三	—

(2) 1918. II. II. の状態

(3) 追加報告死亡ハ比率計算ニ當リ、割賦拂式ニ交戦年ニ分割シタ、然シ極メテ僅少ナル1919年ノ死亡ニツキテハ之ヲ無視シタ

(4) コノ數字ハ死因統計ニハ1919ト示サレテイル、ソレニヨツテ1919年ノ戶籍役場ノ報告ニ對シ1919ノ超過死亡ガ生ズル、ソノ差違ハ平均トシテ追加ニ含マレテキル

これによつて見るに戦病死は一九一五年に於ける短期間の増加（一九一五年には露西亞攻撃軍は、チブス、發疹チブス、赤痢、コレラに苦しめられた）の後に一九一六年には著しく減少した。然るに一九一七及び一八年には再び増加した。一方外因死による死亡は一九一七年まで繼續的に減少した。

戦争による死亡を負傷と疾病の百分比に分つて見ると負傷によるものは八九%に對し疾病によるものは一一%に過ぎない。その理由は人口稀薄な戦場では傳染病蔓延の危険が少なかつたためであるといはれてゐる。

疾病による死亡中、分明せるものの内最大死亡數を示せるは肺炎にして二七、三七一である。肺炎死亡は一九一八年に非常な増加を示したのである。之に次いで肺結核の一九、八八六である。第三位は一九一八年に大流行を見た流感による死亡一四、一六一である。

其他の傳染病の内ではチブスが僅かに一〇、五四八、赤痢の八、〇四〇が主だつたものである。外科技術の非常な進歩と防疫の努力によつて、負傷者は四、二四七、八六四といふ莫大な數に上つたが、その内丹毒による死亡は七〇六、其他の創傷傳染病による死亡は九、三五〇に過ぎなかつた。

之に次いで死亡の大なるは血行器の疾患、消化器の疾患、呼吸器の疾患、神経系疾患にして、自殺も五、一〇六と可成りの數を示してゐる。比較的高齡者の召集の結果として腫瘍（癌其他）による死亡も相當數に上つた。他殺、撲殺で二九四の兵員が死亡した。死刑に處せられたものは一九名である。

所謂戦争傳染病による死亡が少い（露西亞、バルカンでは之等による被害は非常に大であつた）ことは獨逸軍陣衛生施設の優秀性を示すものであらう。コレラ、發疹チブス、マラリア、再歸熱、天然痘による死亡は事實

極めて少數であつた。一九一四——一九年に於ける獨逸兵員の病類別死亡を示せば次の通りである。

不明ノ死因	三九、〇〇三
肺炎	二七、三七一
肺結核	一九、八八六
流行性感胃	一四、一六一
チブス	一〇、五四八
血行器疾患	九、七三八
其他ノ創傷傳染病	九、三五〇
赤痢	八、〇四〇
其ノ他ノ消化器疾患	五、一七四
呼吸器疾患	五、一二六
自殺	五、一〇六
其ノ他ノ神経系疾患	四、九七四
其ノ他ノ死因	四、八七二
泌尿生殖器疾患	四、七〇〇
胃腸カタル	二、三二七
霍亂	二、二八六
癌	二、〇三七
其ノ他ノ器官ノ結核	一、九七七
盲腸炎	一、八三八
コレラ	一、七八五
發疹チブス	一、二三四
腦卒中	一、一三八
チフテリア	一、〇五九
腦脊髄膜炎	一、〇五八
其他ノ腫瘍	七〇六
丹毒	

マ	ラ	リ	ア	七〇三
猩	紅	熱		五八〇
急性粟粒結核				四五四
他殺、撲殺				二九四
性病				二二四
再 歸 熱				四七
傳染性動物疾患				四五
天 然 痘				二二
死 刑				一九
放 射 狀 菌 疹				一五
麻 疹				一四
其他ノ傳染性疾患				八
百 日 咳				五
脊髓性小兒麻痺				五
ペ ー ス ト				一
水 痘				一
流行性耳下腺炎				一
合 計				一八七、九七三

戦闘員の死亡に關聯して捕虜の死亡について一言しよう。

先づ一九一四—二一年に於て、時の獨逸領で死亡せる聯合國側捕虜數は一一〇、一〇一であるといはれてゐる。之を年次別に示せば次の如くである。

一九一四	四、四〇八
一九一五	一四、九三三
一九一六	八、二六四
一九一七	三〇、五七七
一九一八	四四、七四五
一九一九	五、九七六

一九二〇 九五三
一九二一 二四五

一方獨逸に捕虜となつた聯合國側兵員は二五〇萬以上であつたと推定されてゐる。

捕虜として死亡した獨逸兵の數は一九二三年當時にはいまだ確定するに至つてゐない。次表に見らるゝ通り以前の敵國によつて爲された報告と *Zentralnachweisamt für Kriegerverluste und Kriegergräber* によつて推計された最高數とは著しい差異があるのである。年次別の死亡は目下不明である。それ故捕虜となつた獨逸兵士の死亡數については正確な數字は分らない。

單に死亡總數を捕虜總數を以て除した數は死亡率としては過少の率を示す事になる。何者獨逸兵捕虜の大部分は一九一八年に捕虜となつたものであり、従つて捕虜となれる期間は極めて短いからである。

然し獨逸兵捕虜の死亡を過少に示すといふ誤謬を無視し、而して外國から報告された捕虜數(之は非常に過少である)を以てすると獨逸兵の捕虜一萬の内五五五が死亡せる事になる。之に反し獨逸で死亡せる敵國捕虜の死亡は捕虜總數を僅かに二五〇萬と假定すれば一萬につき僅かに四四〇である。事實は前者は更に高く後者は更に低いのである。獨逸兵捕虜の死亡率は獨逸で死亡せる敵國捕虜の死亡率よりは更に高いであらう。

捕虜として死亡せる獨逸兵は次表の通りである。

國 名	捕虜數	死亡數	%	推計死亡數	%
外國ヨリ報告サレタ	九五、一〇九	五、〇六六	五%	一三三、〇〇〇	一三%
總 數					

佛蘭西、白耳義	四四一、五七	三五、三九	六一	三六、〇〇〇	九四
英 國	三三八、三五四	九、九三九	三〇	九、九三九	三〇
合 衆 國	四九五、六〇	九、五二	一九	九、五二	一九
露 西 亞	一七、一〇四	一、五五四	八八	六、〇〇〇	三七〇
ルーマニア	二、三六九	二、五七	一九七	五、〇〇〇	三九〇

1) 一九一八、二月マデハ、ペテルブルグ赤十字ノ報告、ソレ以後ハ公ノ報告ニアラズ。

〔五〕 非戦闘員ノ死亡

(イ) 非戦闘員死亡數

大戦中に於ける正確にして完全なる死亡の記述のためには死亡は一九一四年八月より戦争の事實上の終結を意味する休戦(一九一八年十一月)までの期間に限定されなければならない。然しかかる數字を得ることは不可能であつたから、一九一四—一八年の數字によつて計算の根據とする外ないのである。一九一八年については不正確は僅少である。何となれば一九一八年は眞の交戦期間より一箇月半しか餘分に含んでゐないからである。一九一四年については特別の取扱ひを必要とするであらう。

戦時中の非戦闘員の死亡について先づ考慮しなければならない事は、戦時中激甚なる出生減退によつて乳兒死亡が著しく減少し、従つて死亡全體に大なる影響を及ぼしたといふ事である。

戦時中歐洲主交戦國に於ける死亡は次表の通りである。

白 耳 義	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八
獨 逸	九、六〇〇	八、一〇〇	八、九〇〇	一、〇、二〇〇	一、四〇、六〇〇	
(エセルゲスロー、 トリンゲン)	一、〇〇五、〇〇〇	一、〇三三、六〇〇	一、〇一九、七〇〇	九、〇七〇、〇〇〇	一、〇、二七〇、〇〇〇	一、一、六〇、六〇〇
佛 蘭 西	五、七、〇〇〇	六、三、七〇〇	六、七、一〇〇	五、四、九〇〇	五、八、三〇〇	七、三、一〇〇

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

伊 太 利	六、四、〇〇〇	六、四、四〇〇	六、四、一〇〇	六、二、二〇〇	六、四、一〇〇	一、一、六、七、七〇〇
大ブリテン及ビ アイルランド	六、五、二八〇	六、一、六〇〇	七、〇、〇〇〇	六、五、〇、〇〇〇	六、四、一、〇〇〇	七、八、八、〇〇

1) 此ノ内地震ニヨル死亡三〇、五〇〇ヲ含ム。

伊太利については一九一四年は平和の年であつた事を注意しなければならぬ。

右の表によつて戦時にありては、多くの場合乳兒死亡が著しく減少したに拘らず、死亡總數は一九一三年に比し多かつた事を知り得るのである。

一九一八年の死亡數が一般に極めて多いが、之は流行性感胃に基づく死亡増加の結果である。流感が戦争の直接の結果であるか否か、或は如何なる程度戦争の影響を受けたかは決定困難の問題である。然し戦時缺乏状態(過勞と榮養不足)が傳染病の蔓延に對し非常に好都合な條件であつたといふ事は疑ふ餘地はない。

先の表に於て一九一三年の死亡を一〇〇〇とせば戦時中の死亡は次の如くである。

白 耳 義	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八
獨 逸	一、〇〇〇	一、〇二九	九四一	九六〇	一、一八五	一、五〇二
佛 蘭 西	一、〇〇〇	一、〇四七	一、〇一五	九五六	一、〇七七	一、二五五
伊 太 利	一、〇〇〇	一、〇六二	一、〇五一	九七九	九九二	一、一三〇
大ブリテン及ビ アイルランド	一、〇〇〇	九六九	一、一六	一、〇八七	一、〇五九	一、七五九
1) 地震ニヨル死亡數ヲ除ケバ、指數ハ一、〇七〇トナル。	一、〇〇〇	一、〇三三	一、一〇三	九九六	九八二	一、二七六

右の表に於て一九一六年の數字が一般に著しく低いことが目につく、之には略、二つの理由がある。第一は戦時出生減退の影響が此の年に至つて始めて明瞭に現れたといふ事と、第二は戦争の經濟的社會的惡影響が當時まだ表面化するに至らなかつた事である。

戰時中の死亡増加を總括的に理解するために一九一五—一八年の平均を一九一三年に比較すれば次表の如くである。(一九一三年を二、〇〇〇とする)

白 耳 義	一、一四七
獨 逸	一、〇七六
佛 蘭 西	一、〇六三
伊 太 利	一、二五五
大ブリテンアイ ルランド	一、〇六五

之によつて見るに平時に對する戰時中の死亡増加の最も著しいのは伊太利にして、その増加率は二六%、獨逸は八%、佛蘭西は六%で最低である。

右の如く諸國に於ける死亡状態には非常な差違が認められるのであるが、然し之等の數値は何等戰爭が非戦闘員の死亡に及ぼした實際の影響を明白に示すものではない。

死亡の増加は本表に見らるるよりも、事實は更に大であつたといはなければならぬ。

先にも述べたやうに、出生數の減少の結果として乳兒死亡率が上昇した場合に於てさへ、乳兒死亡數は著しく減少したといふ事が顧慮されなくてはならぬ。

出生減退が著しい程一般に乳兒死亡は減少するのである。第二に注意すべきことは、男子の召集の結果兵役義務年齢にある男子市民數は半分以下に減少したといふ事である。

獨逸に於ける戰時乳兒死亡の減少を示せば次の如し。

獨 逸	一九一三	一九一五—一八	減少率
佛蘭西(七十七縣)	二七七、〇〇〇	一六九、〇〇〇	三九%
	六五、九〇〇	四八、四〇〇	二七%

同期間に於ける出生減退は獨逸四二%、佛蘭西四〇%である。従つて之等の國に於ける乳兒死亡率は上昇したに相違ない。佛蘭西については特にそうである。

右の如き點を考慮せば戰時中の死亡状態の觀察は年齢別體性別に行はれなければならないことは明白である。

(ロ) 年齢體性別死亡

戰時中に於ける一歳以上の非戦闘員の死亡を獨逸について比較すれば次の通りである。

獨 逸	一九一三	一九一五	一九一三—一五	乳兒死亡 對スル一 五—一八 增加割合
佛 蘭 西	七二七、八〇〇	九一二、三〇〇	一八	一〇%
	五二一、六〇〇	五七五、八〇〇	二五%	六%

右の數字は戰爭の實際の影響を示してゐる。

即ち之等の數字は封鎖された獨逸が、生活資料獲得が遮断されなかつた佛蘭西に比し如何に不利な經濟關係に置かれなければならなかつたかを示してゐるのである。

非戦闘員の死亡の判斷に際しては次の事が顧慮されなくてはならない。即ち召集の結果一定の年齢階級に屬する男子人口數が著しく減少したといふ事である。従つて死亡の研究は體性別、年齢別になされなければならぬ。

獨逸(エルザスロートリンゲンを除く)に於ける滿一歳以上の非戦闘員の死亡を男女別に示せば次の如くである。

男 子	一九一三	一九一四	一九一三—一五	對スル一 五—一八 平均ノ增加
女 子	三三三、〇〇〇	三六六、五〇〇	四%	二〇%
	三五一、〇〇〇	三六五、七〇〇	四%	三二七%

右に見らるる通り一九一四年中戦争の月は八月以降の五箇月に過ぎず、男女の死亡状態は全く正常であつた。然るに一九一五—一八年に於ては死亡数の増加は男子よりも女子に於て遙かに多かつた。

戦時中獨逸の、乳兒死亡を含まざる全死亡について見れば、女子の死亡は男子非戦闘員の死亡よりも十六萬多かつたのである。

佛蘭西の七十七縣についても戦時中同一の現象が見られた。佛蘭西に於ける一歳以上の非戦闘員の死亡は次の通りである。

男	子	一九一四	一九一五—一八	一九一四ニ對スル一九一五—一八ノ増(+)減(-)
男	子	二八八、一〇〇	二八四、〇〇〇	(-) 一・四%
女	子	二七〇、一〇〇	二九一、九〇〇	(+) 八・〇%

右の如く一九一五—一八年に於ける佛蘭西の一歳以上男子非戦闘員の死亡は一九一四年に比し若干減少したのである。然るにそれは女子に於て八%の増加を示したのである。

伊太利について、死亡の非常に多かつた一九一八年を一九一四年に比較すれば、乳兒死亡を含む死亡の増加は男子非戦闘員については七二%、女子は九二%にして此處に於ても依然女子の死亡超過を示してゐる。

更に我々は死亡を年齢別に觀察することによつて戦争の影響をより明白に知り得るであらう。

エルザスロートリンゲンを含む獨逸の一九一三年と一九一六年の年齢階級別死亡數を比較すれば次表の通りである。

年齢階級	男		女	
	子	増減	子	増減
〇—一	一四八、七三三	(-) 八五、〇九三	一三三、五三三	(-) 六七、七九一
一—一五	五九、〇三三	(+) 六九、六九五	五九、九三三	(+) 六七、七九〇

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

一五—三〇	三六、二六六	(-) 三、五五六	一〇	三、四〇〇	(+) 四、〇三六	一七五
三〇—六〇	二〇、六三三	(-) 一七、九七七	二五	九、三三九	(+) 一〇、九六四	二二五
六〇以上	一八、〇三三	(+) 一七、三三三	三五	一七、三〇三	(+) 三〇、〇九四	一五〇
合計	五八、六六六	(-) 四七、七七一	八五	四八、五九九	(+) 四六、三三三	—

この數字は非常に意味あるものである。

男子の年齢階級中、兵役に關係なき年齢階級即ち〇—一歳、一—一五歳、六〇歳以上については動きは女子の當該年齢階級と殆ど同一である。然るに一五—三〇、三〇—六〇の年齢階級に於ては男女によつて著しい差違を示してゐるのである。即ちこの年齢階級に於ては男子の死亡數は減少してゐるのに、女子に於ては逆に可成りの増加となつてゐるのである。かかる相違は一部は男子の召集に歸因するものであるが、他の一部は銃後國民の衛生状態の悪化を示すものである。〇—一歳については出生減退の影響を明白に認め得る。尤も乳兒死亡率そのものは戦時中上昇したのであるが出生數が激減したため乳兒死亡數は減少せざるを得なかつたのである。此點については後に述べよう。

獨逸の死亡數は一九一六年に若干減少を示したる後、翌一七年には再び増加したことは先に掲げた表によつて知り得る通りである。

之れは、聯合國側で採つた食糧封鎖の影響が一九一七年に至つて極めて顯著に人口運動の上に現れたためであると謂はれてゐる。

一九一七年に於ける年齢性別死亡を一九一三年と比較すれば次の如くである。

年齢	男		女	
	子	増減	子	増減
〇—一	一七、七五%	(+) 一七、七五%	一八、〇%	(+) 三六%
一—一五	一七、五%	(+) 一七、五%	三七、五%	(+) 三四%

動きは正確に同一である。之に反し兵役義務年齢を含む一五—六〇歳の年齢階級に於ては女子の死亡増加は男子の二倍以上である。食糧難は少年と老人及び妙齡の女子を襲つたことは明白である。

右に述べた如き、年齢性別死亡の上に見らるる特徴ある現象は佛蘭西に於ても見らるるところである。

佛蘭西の非占領地域七十七縣について、一九一四—一九一九年の年齢性別死亡を示せば次表の如くである。

年 齡	男 子		女 子	
	一九一四	一九一九	一九一四	一九一九
一〇	三六、三〇〇	三七、六〇〇	二八、八〇〇	三三、三〇〇
一一—一四	二〇、〇〇〇	二七、四〇〇	一九、九〇〇	三三、七〇〇
一五—一四九	七三、六〇〇	八〇、三〇〇	六六、六〇〇	七〇、八〇〇
五〇以上	一九、四〇〇	一八、五〇〇	一九、五〇〇	一九、四〇〇
平均	一九一四平均	一九一九平均	一九一四平均	一九一九平均
	二八、一〇〇	三七、六〇〇	二八、八〇〇	三三、三〇〇

右の表は一九一四年を一、〇〇〇とすれば次の如くなる。

年 齡	男 子		女 子	
	一九一四	一九一九	一九一四	一九一九
一〇	七四〇	七五五	七四〇	七五七
一一—一四	二、〇〇〇	二、七七一	一、九七三	二、八八六
一五—一四九	八、八七一	九、五〇〇	七、四〇〇	八、二〇八
五〇以上	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
平均	一九一四平均	一九一九平均	一九一四平均	一九一九平均
	二八、一〇〇	三七、六〇〇	二八、八〇〇	三三、三〇〇

之によつて見るに佛蘭西についてもまた兵役義務年齢を含む年齢階級の死亡状態は戦時中男女によつて異なる事を知るのである。

即ち一五—四九の年齢階級の男子については一九一五—一八年の戦時中に死亡は一一%減少したのに女子に於ては二四%の増加を示したのである。之等の相違は動員が解除された一九一九年には再び接近したのである。

之等の資料は歐洲交戦國の死亡状態が戦前に比し悪化したことを意味するものである。

(ハ) 大戦前後に於ける死亡の比較

死亡變動状態は大戦前後に於ける四箇年平均を比較することによつて愈明かとなるであらう。(一九〇二—〇五を一〇〇〇とす)

種 族	一九〇二—〇五	一九〇六—〇九	一九一〇—一三	一九一四—一七	一九一八—二一
白 耳 義 逸	一、〇〇〇	九九二	九六六	九六一	一〇七二
獨 逸	一、〇〇〇	九五九	九〇五	九〇五	九三〇
佛 蘭 西	一、〇〇〇	一、〇〇八	九四四	九八〇	九八一
伊 太 利	一、〇〇〇	一、〇〇六	九四二	八八九	一一五二
大ブリテン及ビ アイルランド	一、〇〇〇	九八八	九四六	九六八	一〇一六
合 計	一、〇〇〇	九八六	九三二	九三三	一〇一〇

右の如く乳兒死亡の激減にも拘らず戦時中の死亡数は戦前の減少傾向を破つて各國共増加したのである。之等の交戦國を全體として見れば、戦時中の非戦闘員の死亡状態は、乳兒死亡の減少にも拘らず、二十世紀の初期よりも劣悪状態にあつたことになるのである。

各國については變化は區々であるが、しかし大戦直前の四箇年間に比し孰れも上昇してゐるのである。

英自治領及び日本の戦時中の死亡状態は次表の如くである。

地 域	一九〇二—〇五	一九〇六—〇九	一九一〇—一三	一九一四—一七	一九一八—二一
濠 洲	四、八〇〇	四、九〇〇	四、九〇〇	五、七〇〇	五、三〇〇
ニュージール ド	八、五〇〇	九、一〇〇	九、六〇〇	一〇、一〇〇	一〇、六〇〇
日 本	九、三〇〇	一〇、三〇〇	一〇、三〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇

右の諸國に於ては大戦前も死亡増加の趨勢にあつたのであるが、一九一

五―一八年には大戦直前に比較して死亡数の増加を示した。死亡増加は濠洲に於ては比較的僅少であつたがニュージーランド及び日本に於ては著しかつた。之等兩國の異常な死亡増加は殆ど全く一九一八年の流感に基づくものである。一九一八年ニュージーランドの死亡数は一六、四〇〇日本は一、四九三、〇〇〇といふ驚くべき數に達した。濠洲は一九一九年に疫病にとりつかれ、その年に六五、九〇〇人の死亡を出したのである。

歐洲中立國の大戦前に於ける死亡は孰れも緩慢なる低下の傾向にあつた。然るに一九一五―一八年に於ては例外なく死亡の激増を成したのである。

	一九〇二	一九〇六	一九一〇	一九一四	一九一五
デンマーク	一〇五	一〇九	一一三	一一八	一一八
フィンランド	三七、〇〇〇	三六、〇〇〇	三五、九〇〇	三五、七〇〇	三五、三〇〇
オランダ	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇
ノルウェー	八五、〇〇〇	八三、〇〇〇	七九、〇〇〇	七七、〇〇〇	九一、六〇〇
スウェーデン	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇
スイス	八〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	六八、〇〇〇	八五、六〇〇
スペイン	六〇、〇〇〇	五九、〇〇〇	五八、〇〇〇	五七、〇〇〇	五七、〇〇〇
	四八四、〇〇〇	四七五、〇〇〇	四九〇、〇〇〇	四八〇、〇〇〇	五二四、〇〇〇

右の如き死亡増加は他の諸國に於けると同様、相當部分一九一八年の流感に基づくものである。然し一九一八年を除外して見ても、この期間の死亡數は多くの國に於て、一九一〇―一三年の平均に比して多いのである。即ち一九一五―一七年の平均數は次表の通りである。

デンマーク	三八、六〇〇
フィンランド	五五、二〇〇
オランダ	八三、六〇〇
ノルウェー	三三、八〇〇

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

スウェーデン	七九、四〇〇
スイス	五一、八〇〇
スペイン	四五三、〇〇〇

但しスイスのみは此の三年間に死亡減少を示した。之は激甚なる出生減退によつて説明せられ得るものである。これはスイスに於ける戦争の影響が如何に大であつたかを物語つてゐる。

(三) 出生率、乳兒死亡率及び死産率

尙獨逸の乳兒死亡率を出生率と關聯せしめてここに觀察してみよう。獨逸の出生率及び乳兒死亡率は第二十世紀の初期以來非常な變化を示してゐる。出生率即ち一五―五〇歳女子千人當りの出生數は大戦まで確固として低下し、そして出生率の低下にはこれと同程度の乳兒死亡率の低下が隨伴したのである。

一九〇〇年より一九一四年に至る三箇年平均の出生率及び乳兒死亡率、竝に一九二―一九一四年を一〇〇とせる指數を示せば次表の如くである。

一九〇〇―一〇二	一四六・一	二〇五	一九二一	一三四
一九〇三―一〇五	一三八・〇	二〇二	一九二二	一三二
一九〇六―一〇八	一三三・六	一八〇	一九二〇	一一八
一九〇九―一一一	一二二・五	一七五	一九二一	一一四
一九二一―一四	一一〇・六	一五三	一九〇〇	一〇〇

之によつて見るに、本世紀初期の出生率は大戦前三箇年平均に比較して三二%高く、又本世紀初期の乳兒死亡率も大戦前に比し三四%高かつたのである。

右の如き出生減退と乳兒死亡率低下の平行關係は出生減退の有害なる結果を殆ど全く相殺するの作用を營んだのである。

大戰時に於ける出産率乳兒死亡率は次に示す如くである。

出 産 率	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九	一九二〇
乳兒死亡率率	一四・一	一四・七	一五・二	一五・五	一五・七	一五・七
戰時中出産率は著しく低下し、一九一九、一九二〇年に至つて再び上昇したのであるが、戦前の水準には達し得なかつたのである。	一四・八	一四・〇	一四・八	一五・七	一四・五	一三・五

然るに大戰中、乳兒死亡率は却つて低下し、平均一四五といふ數値を示した。一般に戰時中竝に戦後の乳兒死亡率は戦前よりも若干低いのである。ただ一九一八年には多少高い率を示したのであるが、この年は流行性感冒の蔓延によつて一般死亡率も高かつたのである。

死亡に關聯して戰時中の死産が如何なる状態にあつたかについて考察してみよう。

死産率即ち出産一〇〇〇につき死産數は第二十世紀以來漸減の傾向にあつたのである。前世紀の八十年代に於ては死産率は四〇以上であつたといはれてゐる。大戰初期の死産率は約二九であるから、此の間に率は二八%以上低下した譯である。

然るに大戰中及び大戰後僅かではあるが、死産率は再び増加してゐる。

一九〇〇—一九二〇年に於ける年平均死産率は次の如くである。	一九〇〇	一九〇三	一九〇六	一九〇九	一九一二	一九一五	一九一八
	一〇・二	一〇・五	一〇・八	一一・一	一一・四	一一・七	一二・〇
	三三・二	三三・四	二九・七	二九・三	二九・五	三〇・二	三〇・八

右によつて見るに戦前減退しつつあつた死産率は戰時中再び上昇したのである。かかる死産率上昇が如何なる原因に基づくものであるかについて

は専門家の研究に委ねよう。

(六) 戰時中に於ける總死亡

(イ) 總死亡數

一九一三年より一九一九年までの獨逸の總死亡は次表の通りである。

年	男子死亡數		女子死亡數		總死亡數	
	含戰死	除戰死	含戰死	除戰死	含戰死	除戰死
一九一三	—	五五〇、五〇	—	五〇七、七六	—	一、〇五八、二六六
一九一四	八三、三三六	五七四、四二	—	五三、九七	一三七、三〇三	一、〇八三、七八
一九一五	九七、一五五	五四一、四三六	—	五二、三三五	一四九、四七〇	一、〇六二、七五一
一九一六	八〇、〇五五	四九二、六六	—	五〇、八〇一	一三〇、八五七	九八三、四七〇
一九一七	八〇、〇〇九	五九〇、九〇	—	五四、三三四	一三七、三三三	一、〇八二、三三四
一九一八	六九、八七	五九〇、二〇	—	六六、〇一六	一六三、九三三	一、一五六、一三六
一九一九	五〇、三二	四八七、二七	—	五二、七五	一〇七、二八四	一、〇〇三、九七〇
一九一四—一九一九	四、九六七三	三、三四、九四二	—	三、二八、〇七	八、二七、八八〇	六、五〇六、〇三九

右によつて見るに一九一六年以降殊に一九一八年には女子の死亡超過が極めて顯著となつた事を知るのである。出生減退のために乳兒死亡は著しく減少したことを考慮すれば非戰闘員の死亡特に女子の死亡が非常に大であつたことを知り得るのである。女子の死亡超過は男子の召集のため女子人口數が比較的増加したことの當然の結果であるが、その原因以外一九一六年以後經濟封鎖の影響が強く現はれ始めたことも大きな原因をなしてゐる。一九一八年の死亡激増は勿論流行性感冒に基づく肺炎又は結核死亡の増加によるものである。

(ロ) 年齢、體性別總死亡

一九一三—一八年に於ける男女五歳階級別死亡率(各年齢階級中間人口千につき)を示せば次表の通りである。尙本死亡率には戰闘員の死亡を

も含んでゐること勿論である。

(大男子
細字ハ女子)

年齢階級	一九一三	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八
年一五	二三五	二三四	二七二	一五六	一五八	一九八
五一一〇	二二九	二二七	一六三	一五〇	一五二	二〇六
一〇一一五	三〇〇	三〇〇	四〇二	三九八	四〇三	五〇五
一五一一〇	三〇〇	三〇〇	四〇二	三九八	四〇三	五〇五
二〇一二五	三〇〇	三〇〇	四〇二	三九八	四〇三	五〇五
二五一一〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
三〇一三五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
三五一四〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
四〇一四五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
四五一五〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
五〇一五五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
五五一六〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
六〇一六五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
六五一七〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
七〇一七五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
七五一八〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
八〇一八五	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
八五一九〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
九〇以上	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

右の表には乳兒の死亡は含まれてゐない。

男子二〇—二五歳の死亡率は一九一五年に最高に達し、一九一三年の十倍を示した。一九一四年には八倍半、一九一六年には一二倍、一九一七年には十倍、一九一八年には一三倍であつた。二五—三〇歳の死亡率は一九一五年に最高を示し、平時の一〇倍に達した。

一五—二〇歳の死亡率は一九一七、一八年には一九一五年よりも高率を示した。五五歳以上の死亡率は一九一七年に最大率を示したのであるが、他の年齢階級に於ては一九一八年は最高率を示してゐる。

女性については、高年齢の死亡率は一九一七、一八年の兩年に於て略、伯仲してゐる。

一般に女子及び男子の最若、最老年階級に於ては死亡率は年々上昇を示してゐる。然しその上昇は一九一六年までは比較的緩慢にして、一九一七、一八年に著しい上昇を示してゐる。

男子一五—四五歳の死亡率は戦時中非常に大なる變化を見せた。平時に於ては二〇—二五歳の死亡率は非常に低く、それから四五歳まで漸次上昇するのであるが、戦時に於ては二〇—二五歳の死亡率は最高率を示し、平時の正に十三倍に達し、以後四五歳まで急速に低下してゐるのである。四五歳以後に於ては戦時死亡率は平時死亡率に平行してゐる。戦時死亡率は平時死亡率よりも高いことは勿論であるが、兩者の差違は高年齢まで殆ど變化がないのである。

女子の死亡率は四五歳以後は男子と類似の趨勢を示してゐるが、戦時平時の差違は男子に於けるよりも少しく大である。之は恐らく戦時に於ける疾病と缺乏が男子よりも女子の死亡の上に特に強く作用したことを意味するのであらう。一五—四五歳階級に於ては女子死亡率の上昇は特に一九一

八年に於て著しかつた。それは平時の三倍にも達してゐる。この死亡率上昇は流感に基づくものであつて、流感に戦争と封鎖によつてその抵抗力を害された若い女子に對して特に激しい影響を及ぼしたのである。

總死亡が男子について如何なる状態にあるかを男女全體(但し乳兒死亡を除く)について見れば次の如くである。

エルザスロートリンゲンを含む獨逸の戦時中の死亡は次の通りである。	一九一三	一九一五—一八	平均	増加率
男子	三三三,〇〇〇	八〇七,〇〇〇	一一九・〇%	
女子	三五一,〇〇〇	四六三,五〇〇	一三二・七%	

右の如く戦死は、その結果として激しい男子死亡超過を惹起した。之が年齢構成及び男女比の上に如何なる作用を及ぼせるかについては後に述べらる。

(ハ) 獨逸以外の諸國に於ける總死亡

獨逸以外の歐洲交戰國及び英自治領に於ける戦時中の總死亡を本世紀初期以來の死亡に比較すれば次の通りである。

	一九〇二	一九〇六	一九一〇	一九一四	一九一五
白 耳 義	一〇五	一〇九	一一三	一一八	一一八
佛 蘭 西	一一九	一一八	一一五	一一八	一一五
伊 太 利	七六二	七六八	七一九	八七七(1)	一〇四六
大ブリテン及ビ	七三三	七二七	六八一	六四三(2)	九七四
アイランド	六八四	六七六	六四七	七〇〇(1)	八七二
濠洲	四四・八(3)	四五	四九・四	五二	六六
ニュージール	八・五(4)	九・一	九・六	一〇・一	一五・八
カ ナ ダ	—	—	一〇〇(5)	一〇一	一二七
1) 近以値	1914	ハ伊太利ニツイテハ	平時テアル	3) 1903—05	ノ平均
4) 1903	5) 1911—13	平均			

(單位一、〇〇〇)

右の表に於て一九〇二—〇五を一、〇〇〇とすれば次表の如くなる。

白 耳 義	一九〇二	一九〇六	一九一〇	一九一四	一九一五
佛 蘭 西	一〇五	一〇九	一一三	一一八	一一八
伊 太 利	九六二	九六六	九六六	九六六	九六六
大ブリテン及ビ	九四二	九四四	九四四	九四四	九四四
アイランド	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一
濠洲	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一
ニュージール	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一	一一・一

右に見らるる通り、戦時中各國とも正常状態が破れたのである。歐羅巴諸國については、若し状態が正常であつたならば死亡は恐らく一九一四—一八年には減少したであらうと思はれるのである。

之に反し英自治領については死亡は逆に増加したであらうと考へられるのである。

(ニ) 獨逸に於ける死因別總死亡

大戰及び其の前後に於ける獨逸の死因統計(戦闘員、非戦闘員を含む)は次の通りである。

死亡率は男女人口各一萬についての數字である。

(太字ハ男子數
細字ハ女子數)

死 因	一九一三	一九一四	一九一五	一九一六	一九一七	一九一八	一九一九	一九二〇
外 因 死	六三	六二	七五	七〇	八五	八八	九三	九八
流行性感冒	一六	一七	一七	一八	二二	二二	二二	二二
肺 炎	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
結 核	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
呼吸器疾患	八〇	七三	七四	七八	七四	八二	九〇	七三

老 衰	142	131	141	152	155	161	162	181	162	177
血行器疾患	160	156	166	190	199	218	214	255	244	282
神経系疾患	168	165	171	165	166	194	177	214	176	212
消化器疾患	145	158	141	155	133	183	186	212	174	216
先天性弱質	156	197	134	155	127	150	108	107	131	131
腫 瘍	122	126	119	125	122	128	126	120	120	120
泌尿生殖器疾患	83	85	81	93	80	96	82	85	88	88
自殺	235	228	226	228	240	245	230	230	230	234
自 殺	227	228	228	229	231	231	230	230	230	237
ヂフテリア	204	181	200	222	222	222	222	222	222	222
創傷傳染病	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99
百日咳	100	107	109	109	113	113	113	113	113	113
麻 疹	115	118	111	119	111	111	111	111	111	111
チブス	104	105	104	105	108	108	108	108	108	108
猩紅熱	99	99	111	111	111	111	111	111	111	111
其他ノ傳染性疾患(天然痘、赤痢、傷寒、チブス、コレラ、腸脊髄膜炎等)	04	04	06	05	05	05	05	05	05	05
其他の死因	117	115	112	115	110	110	110	110	110	110
死因不明	118	115	117	115	118	118	118	118	118	118

右の表の最初の欄の死因名即ち外因死は原文では "Verunglückung oder anderer gewaltsamer Einwirkung" となつてゐる。内容の上から云へば大

體我國死因統計の外因死に相當するやうに考へられるので一應外因死として置いたが、兩者は完全には一致してゐない。例へば我國の外因死は自殺を含んでゐるのであるが、ここに外因死と譯した死因中には自殺を含んで

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

ゐないからである。然し大局の判断には差支へないであらう。戦時中に於ける死因別死亡の研究は戦時國民保健對策樹立のための基礎として極めて重要である。之れについては専門家によつて充分調査研究されてゐることと思ふので、之の方面の素人たる筆者が今更紹介にも及ばないであらう。ここでは非常に特徴あるものについて極めて簡単な記述をなすに止めよう。

先づ男子の外因死であるが、之には戦死が含まれてゐる關係上戦時に於て非常に増加したのは當然である。この死亡率は一九一五年に最高に達し一二六といふ數字を示した。これは同年の總死亡率の殆ど半分を占めてゐるのである。次の二年間には、この死亡率は減退したが、一九一八年には再び一〇六まで上昇し男性一般死亡率の殆ど三分の一を占むるに至つた。

一九一八年の男子の一般死亡率は一九一五年の二八七より三〇四へと上昇したのであるから、自然的死因もまた著しく上昇したに相違ないのである。女子については、この死因に基づく死亡は男子とは反對に一九一七、一八年の兩年に於て、人口一萬につき二・二と増加してゐることは注目すべきことである。之は恐らく産業に於ける女子従業員の増加及び國境地方の都市が敵機によつて激しく攻撃されたためであると見られてゐる。

外因死に次いで高い死亡率を示してゐるのは流行性感冒である。尤も之は一九一八年だけの事であつて、男子及び女子の死亡率はそれぞれ二七・六及び三〇・八に達した。今日まで傳染病中、それによる女子の死亡が男子よりも多いのは百日咳を除けば流感だけである。従つて女子の死亡超過を當時不良であつた榮養状態にのみ歸することは出来ないであらう。

更に一九一八年の流感は多くの中立國例へばスペイン、ポルトガルに於て、獨逸に於けるよりも比較的多數の死亡者を出したといふ事、及び特に

中年の最も強壯なものがこの傳染病で死亡してゐる事を考へ合せて見れば、榮養不良が死亡率上昇の唯一の原因でないことは疑ひない。この點に關してはグラージェは極めて興味ある觀察をなしてゐるので、ここに紹介しよう。

彼は流感によつて男子よりも女子が餘計に死亡したといふことは恐らく女性の虚榮に基づくものであらうと謂つてゐる。因に戦時中獨逸に於て、極めて薄手の、節孔の開いた靴下が婦人の間に流行したといふ事であり、また、この靴下に似合ふ靴が流行したといふ事である。靴については如何なる意匠のものが流行したか分明しないが、矢張り靴下と同様孔だらけの靴であつたのであらう。之等の不健康な服裝が流感に對する婦人の抵抗力を低下したといふのである。グラージェは「流行と死亡」といふ章が書かれなくてはならないと皮肉つてゐる。この議論は婦人の服裝特に戦時下の冬の服裝については大いに改善すべきところがあることを示すものとして興味がある。

更にグラージェは婦人が生活資料を買ふために長時間佇立してゐることが、婦人の健康を害し、従つて婦人の死亡を高めた大きな原因であると指摘してゐる。最近の我國の實狀に鑑み大いに考ふべき言葉である。

さて流感は一九一八年以後も年々繰返し流行したのである。一九一九、二〇年に於ける流感死亡率が戦前よりも著しく高いのはそのためである。

次に肺炎による死亡率は流感の結果として、一九一八年に非常に増加した男子については二六・九、女子に於て二二・五と平時の殆ど倍の死亡率を示したのである。一九一八年に兩メクレンブルグを除いた獨逸に於て流感のために死亡せるものは一八七、八四六人、肺炎による死亡一五七、七八〇人にして外因死三三五、七七五に次ぐ死亡數を示した。肺炎による死亡は流

感とは異なり、一九一九、二〇年には減少し、再び正常状態に戻つてゐる。次に慢性的な結核と老衰は戦時缺乏の選擇的作用を最も強く受けたのである。それ故結核並に老衰による死亡率は既に一九一五年から上昇し始めてゐるのである。

結核及び老衰による死亡率が男子よりも女子に於て著しい上昇を示したといふ事實は、女子結核患者の抵抗力が最も早く失はれたことを意味するものであらう。女子の結核死亡率は一九一八年で峠を越したが、その低下は男子に比して非常に緩慢であつた。一九二〇年には男子の結核死亡率は女子の死亡率以下に低下した。かかることは獨逸で始めて見らるる現象であると謂はれてゐる。結核による女子の超過死亡については、次の如き事情も一因として作用してゐることは明白である。即ち二〇—四〇歳の結核危険年齢にある生存者の全人口に對する割合は男子に於て著しく減少した一方女子に於ては増加したといふ事である。

流感、結核の外に女子の死亡率を著しく高めたものに産褥熱がある。之は戦時に於ける醫師、産婆の不足或は石鹼其他消毒藥品の品質低下、缺乏によるものであるといはれてゐる。

出産一萬についての産褥熱死亡率は次の通り年々著しい上昇を示した。

一九一四	一・八四
一九一五	五・七三
一九一六	六・七七
一九一七	八・八九
一九一八 (前半期)	一四・八四

交戦國に於ける戦時結核死亡率の眞の状態を知るためには周圍の中立諸國に於ける死亡率との比較が必要であらう。

大戦中歐洲に於ては、交戦國たると中立國たるとを問はず、如何なる國

も戦争の悪影響を免れ得なかつたのである。有ゆる國は例外なく結核死亡率の顯著な上昇を示したのである。結核死亡率は塊太利(新領土)及びチェッコスロバキアに於て最も著しき上昇を示したのである。

一九一七年の塊太利の死亡率、一九一八年のチェッコスロバキアの死亡率はいづれも人口一萬につき四〇以上を示したのである。

諸國の内には結核死亡率が戦前に比し二倍になつたものもあり、五割の増加は決して稀しくない。例へば獨逸の人口一萬五千以上の都市の結核死亡率は人口一萬につき一九二三年の一五・七より一九一八年の三〇・〇へ上昇した。同期間に和蘭は一四・二より二〇・三へ、英國は一三・四より一七・三へと上昇してゐる。

ハンガリー、フィンランド、スイス、ノルウェーは戦時中最も影響の少なかつた國である。

一般に戦時食糧状態が最悪であつた國は高い結核禍を蒙つたのである。結核はその活動状態が或る程度患者の營養状態によつて左右される疾病であると謂はれてゐる。然しそれにも増して決定的な重要性を有するものは結核対策の如何であるといふことである。之等二つが共に悪化するときは死亡率は最も高いことは當然であらう。戦時に於ては此等二つの條件が好ましからざる状態に陥つたであらう事は容易に想像し得る處である。

然し事實上戦争が終結した一九一八年以後に於ては各國とも結核死亡率は改善されたのである。一九二〇年には戦前の率よりも低下を示した國もある。例へばハンガリー、デンマークの結核死亡率は戦前よりも著しく低いのである。

歐洲諸國に於ける大戦前後の結核死亡率(全結核、人口一萬につき)は次表の通りである。

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

國名	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年
獨逸 全 國 ¹⁾	一四三	一四三	一四八	一六二	一七二	一八八	二〇四	二〇〇	二〇四	二〇六	二〇〇	二〇〇	二〇六
人口一萬五 千以上都市	一五七	一六一	一七二	一八八	二〇四	二〇〇	二〇四	二〇〇	二〇四	二〇六	二〇〇	二〇〇	二〇六
塊太利(新領域) ²⁾	二五九	二五六	三三二	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七
ハンガリー ³⁾	三二四	二九四	三三七	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九	三三九
チェッコスロバ キア ³⁾	三二一	三三六	三三八	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一	三九一
スイス 全 國	二〇一	一九〇	一八七	一八八	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二
人口一萬以上都 市	二〇九	二〇七	二〇四	二〇〇	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二
伊 太 利	一四九	一四五	一五八	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六	一六六
ス ペ イ ン 全 國	一五二	一五四	一五九	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五	一六五
四 九 州 首 府	二六二	二九〇	二七七	二九八	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四	三〇四
佛 蘭 西	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四	二二四
白 耳 義	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
イ ン グ ラ ン ド 全 エ ー ル ス	二三四	二三六	二五四	二五六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六
和 蘭	一四二	一四〇	一四四	一六七	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二
デ ン マ ー ク 全 都 市	二二六	二二八	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二
ス ウ ー エ ー 全 國	一八五	一九五	二〇四	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六
全 都 市	三三三	三三六	三三三	三三七	三三八	三三八	三三八	三三八	三三八	三三八	三三八	三三八	三三八
ノ ル ウ ェ ー 全 國	三三一	三三二	三三九	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
全 都 市	三三〇	三三六	三三五	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二	三三二
フ ィ ン ラ ン ド 全 國 ⁴⁾	二六一	二五八	二六八	二七六	二八〇	二八八	二八八	二八八	二八八	二八八	二八八	二八八	二八八
都 市	二九八	二七八	二八八	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇	二九〇
田 園	二五五	二五四	二六八	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五

* 假數。

- 1) メクレンブルグ、エルザスロートリンゲンヲ含マズ。
- 2) 一九一三—一八八本國、一九一九—二〇ハ新領域。
- 3) ベーメン、メーレン、シユレジアノミ。
- 4) 肺結核ノミ。

結核死亡については全國以外に都鄙別の比較が必要であるが、多くの國についてかかる數字は得られなかつた。そこで之に代るものとして各國の首府の數字(非戰鬥員人口一萬につき)を掲げることとする。之と全國或は一般都市の死亡率(獨逸其他若干に國についてこの種の數字が發表されてゐる)とを比較することによつて田舎に於ける結核死亡率を推測することが出来るであらう。

ニューヨーク	一九三〇	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四一	一九四二	一九四三
ロンドン	二〇〇	一九八	一九六	一九五	一九三	一九二	一九〇	一八八	一八六	一八四	一八二	一八〇	一七八
パリ	二六五	二七七	二八七	二九七	三〇七	三一七	三二七	三三六	三四五	三五五	三六四	三七三	三八二
ベルリン	三三八	三三八	三九〇	三九二	三九四	三九六	三九八	四〇〇	四〇二	四〇四	四〇六	四〇八	四一〇
シカゴ	一八四	一九四	二〇七	二二〇	二三三	二四六	二五九	二七二	二八五	二九八	三一〇	三二二	三三三
ウイーン	二六六	二六四	二六二	二六〇	二五八	二五六	二五四	二五二	二五〇	二四八	二四六	二四四	二四二
モスクワ	三〇二	二九一	二八〇	二七〇	二六〇	二五〇	二四〇	二三〇	二二〇	二一〇	二〇〇	一九〇	一八〇
ペテログラード	二五〇	二四七	二四三	二三九	二三三	二二七	二二〇	二一三	二〇六	一九九	一九二	一八五	一七八
ベテログラード	二五〇	二四七	二四三	二三九	二三三	二二七	二二〇	二一三	二〇六	一九九	一九二	一八五	一七八

* 巴里ハ肺結核ノミ。

右によつて見るにベルリン及びウイーンの結核死亡率は一九一七、八年に驚くべき上昇を示した。一九一八年のベルリンの死亡率は一九一三年に比し約七八%の増加、また一九一八年のウイーンの結核死亡率は一九一三年に比して一〇〇%以上の激増を示した。かかる結核死亡率の顯著なる上昇の主因は食糧難と見るべきものであつて、決して戦時産業に於ける女性の産業活動ではないといふ主張が行はれてゐるが、恐らくそうであらう。といふのは産業關係が若し眞の原因であるとすれば、パリ、モスクワの結核死亡率も戦時中上昇しなければならぬ筈だからである。何となれば戦時労働状態はパリ、或はモスクワでも獨逸と何等異るところがないからである。現にモスクワの市民戦争につれて、一九一九年に食糧難が出現したとき

には、同市の結核死亡率が上昇したのである。

上に述べた以外の都市の内ではロンドンが稍、顯著な上昇を示してゐる。尤も戦後には同市の結核死亡率は目覺しき改善を遂げたのである。

戦後の急速なる死亡率低下はアメリカの大都市に於ても見られたのである。之等の都市の死亡率低下は強力な結核豫防法の賜と認められてゐる。

歐羅巴の首府の内では戦時中最高の結核死亡率を示したのはウイーンではなくて、ワルシャワであつて、そこでは一九一七年に實に八四・〇といふ結核死亡率を示したといはれてゐる。

(七) 戦時中の出生超過

以上出生並に死亡について述べたのであるが、次に之等の資料に基づいて、戦時中の出生超過(或は死亡超過)が如何なる變化を受けたかをみよう。交戦諸國及び中立諸國に於ける、大戦時を含む、本世紀初期以來の出生死亡のバランスは次表に見らるる如くである。(+)は出生超過、(-)は死亡超過)

歐洲主交戦國に於ける年平均出生超過

獨逸	(+) 八四一	(+) 八八九	(+) 八二三	(+) 五四六	(-) 四〇五
佛蘭西	(+) 六二	(+) 一七	(+) 三四	(-) 一四五	(-) 六〇二
伊太利	(+) 三五三	(+) 三七〇	(+) 四四三	(+) 四七一	(-) 一三六
大ブリテン及ビ アイルランド	(+) 四九二	(+) 四八四	(+) 四五九	(+) 四〇二	(+) 五五
白耳義	(+) 七三	(+) 六五	(+) 五八	(+) 四三	(-) 三三
合計	(+) 一、八二二	(+) 一、八二五	(+) 一、八二七	(+) 一、三二七	(-) 一、二二〇

1) 近似値、2) 伊太利ニトツテハ一九一四ハ平時デアル。

右の如く歐洲主交戰國に於ては戰時中英國のみが出生超過を示したに過ぎないのである。然しそれは以前に比し極めて僅少である。

他の諸國に於ては孰れも激甚なる死亡超過を示し、殊に佛蘭西に於ては驚くべき多數に達した。

次に歐洲中立諸國に於ける出生超過を示せば次表の通りであつて、ここに於ても戰爭の影響は無視出來ない。

	一九〇二	一九〇六	一九一〇	一九一四	一九一五
デンマーク	(+) 三六	(+) 三八	(+) 三八	(+) 三七	(+) 三二
フィンランド	(+) 三七	(+) 四〇	(+) 三九	(+) 三七	(+) 一六
オランダ	(+) 八五	(+) 八八	(+) 九二	(+) 九九	(+) 七九
ノルウェー	(+) 三一	(+) 二九	(+) 二九	(+) 二九	(+) 二七
スウェーデン	(+) 五五	(+) 六一	(+) 五六	(+) 五一	(+) 三五
スイス	(+) 三五	(+) 三六	(+) 三六	(+) 三四	(+) 一六
スペイン	(+) 一八四	(+) 一七六	(+) 一八三	(+) 一五八	(+) 九七
合計	(+) 四六三	(+) 四六八	(+) 四七三	(+) 四四五	(+) 三〇二

(單位一、〇〇〇)

	一九〇二	一九〇六	一九一〇	一九一四	一九一五
濠洲	(+) 五七 ¹⁾	(+) 六六	(+) 七八	(+) 八六	(+) 六五
ニュージール	(+) 一三 ¹⁾	(+) 一六	(+) 一七	(+) 一八	(+) 二二
カナダ	—	(+) 一〇四 ²⁾	(+) 一二七	(+) 一〇二	—

1) 濠洲ハ一九〇三—〇五平均、2) ニュージールランドハ一九〇三。

英自治領の數字については、戰前の趨勢より推して若し状態が正常であつたならば、出生超過は戰時中更に増大したであらうと考へられる。従つて出生減退は數字が示してゐる以上に激しかつたといはなければならぬ。英自治領の戰時中出生超過は次表の如くである。

(單位一、〇〇〇)

今までに得られた資料によつて歐洲四大列強に於ける出生減退及び死亡増加が齎した人口損失を計算することが出来る。

一九一三年の状態を基準として計算された人口の全損失は次の通りである。

國	一九一五、五月一日 生減退	一九一四 人口一〇 〇ニツキ	一九一四 死亡増加	一九一四 人口一〇 〇ニツキ
獨逸	三、五九〇、〇〇〇	五三	二、一六〇、〇〇〇	三三
佛蘭西	一、三九〇、〇〇〇	三五	一、五四〇、〇〇〇	三九
伊太利	一、三〇〇、〇〇〇	三六	一、二四〇、〇〇〇	三四
大ブリテン及ビ アイルランド	八四〇、〇〇〇	一八	九二五、〇〇〇	二〇
合計	七、二〇〇、〇〇〇	三八	五、八六五、〇〇〇	三一

從つて全損失は次の如くである。

人口の全損失 一九一四年人口
一〇〇ニツキ

國	一九一五、五月一日 生減退	一九一四 人口一〇 〇ニツキ	一九一四 死亡増加	一九一四 人口一〇 〇ニツキ
獨逸	五、七五〇、〇〇〇	八・五	—	—
佛蘭西	二、九三〇、〇〇〇	七・四	—	—
伊太利	二、五四〇、〇〇〇	七・〇	—	—
大ブリテン及ビ アイルランド	一、七六五、〇〇〇	三・八	—	—
合計	一二、九八五、〇〇〇	六・九	—	—

1) 伊太利ニツイテハ出生減退ハ一九一六、一一一九一九、七マデ、死亡増加ハ一九一五—一八マデトシテ計算。

右によつて見るに之等四箇國に於ける人口の全損失は略々人口數の七%に相當するのである。損失は英國に於て最も少く、獨逸に於て最大である。尤も部分的な資料に基づいて推計されたオーストリー・ハンガリーの損失は人口の一〇—一%であつて獨逸よりも甚だしい。英自治領に於ける損失は極めて僅少であり、例へば濠洲に於ては約二%、ニュージール

ドも同じく二%である。

右に示されてゐる人口の全損失數は之等の諸國に於て、大戰後これだけの人口數が現實に減少したといふ意味では勿論ない。戦争なかりせば得べかりし出生は一九一三年を基準として計算されてゐるのであるが、前世紀末以來の出生減退を考慮せば戦争がなくとも一九一三年の出生率は其後更に低下したと思はれる。一方死亡率については、若し戦争がなかつたならば、一九一三年よりも更に改善されたことと考へられる。この兩者は互に相殺さる關係にあるものであるから、一九一三年を基準とする計算の誤差はそれだけ減少するものと見て良いであらう。そこで右に示した全損失は戦争なかりせば得られたであらう人口數を示すものと見て大過ないであらう。

次に世界大戰の直前及直後に於ける推計人口數は、大戰中各國人口が蒙つた損失を最も總括的に表現するものであらう。人口の發展を規定するものとしては出生、死亡の所謂自然的因子の外に人工的或は社會的因子を無視することは出来ない。然し人口運動の自然的因子は全體として見て決定的なものである。そこで、今假に社會的因子に基づく人口數の變動を除外して、(移民運動については後に述べる)自然的因子に基づく人口の發展を觀るに、世界大戰前後に於ける歐洲主交戰國の人口數は次表の如くである。尙戰時中の出生減退は略、一九一九年七月(休戰後九箇月)に終つてゐる。従つて人口數の推計には一九一九年の最初の七箇月を包含せしむるのが良い。同様に一九一四年については、最後の五箇月(同年八月以降)が包含されなくてはならない。

然るときは一九一四年七月末及び一九一九年七月末の推計人口數は次表の如くである。

(單位一、〇〇〇)

國名	一九一四年七月末人口		出生超過(+) 死亡超過(-)		一九一九年七月末人口		一九一四年七月末人口		一九一九年七月末人口	
	推計	實數	推計	實數	推計	實數	推計	實數	推計	實數
獨逸	6,800,000	6,800,000	1,500,000	1,500,000	6,100,000	6,100,000	6,100,000	6,100,000	6,100,000	6,100,000
佛蘭西	3,700,000	3,700,000	2,500,000	2,500,000	2,700,000	2,700,000	2,700,000	2,700,000	2,700,000	2,700,000
伊太利	3,800,000	3,800,000	3,500,000	3,500,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000
大ブリテンアイ ランダ	4,200,000	4,200,000	3,500,000	3,500,000	4,200,000	4,200,000	4,200,000	4,200,000	4,200,000	4,200,000
白耳義	7,600,000	7,600,000	2,300,000	2,300,000	7,500,000	7,500,000	7,500,000	7,500,000	7,500,000	7,500,000
合計	27,100,000	27,100,000	10,300,000	10,300,000	24,800,000	24,800,000	24,800,000	24,800,000	24,800,000	24,800,000

1) 一九一四年ノ領域。

2) 伊太利ノ參戰ハ一九一五年五月ニシテ、一九一五年五月—一九一八年末マデノ死亡超過ハ七十萬ニ達シタ。

之によつて見るに歐洲主交戰國に於ては、僅かに英國を例外とするのみで、他は孰れも人口數の減少を來したのである。

人口減退率が國によつて可成りの差違があるが、各國が戦争に國力を傾けた、その強度は同一でないから、人口の蒙つた損失の程度が異なることは當然である。

英國は最も好條件の下にあり、出生減退、戦死者のあつたにも拘らず僅かではあるが人口數の増加を示したのである。

佛蘭西は最も劣悪状態にあつた。伊太利及び白耳義に見らるる、比較的低い減退率は、此等の國に於ける戦死者が歐洲列強及び佛蘭西に比して少なかつた事に基づくものである。

右に示した一九一九年七月末の獨逸人口は六千六百十七萬人であつて、之を一九一四年七月末の六千七百八十萬に比較して二・四%の減少に相當

するのである。この數字は一見小さく見えるかも知れないが、之を實數として見れば百六十三萬といふ莫大な數に上るので、毎年獨逸は四十萬以上の人口を失つたことになるのである。

戰時中に於ける獨逸の死亡超過(一九一四年七月末人口に對し二・四%)が如何に驚嘆すべき數字であるかを知るために、大戰前三十年間に於ける人口増加状態を検することは適當であらう。

獨逸の一九一〇年以後に於ける十年毎の人口増加率は次表の通りである。

國勢調査人口	増加率	中間人口 一〇〇〇ニ ツキ年平 均増加
一八八〇	四五、二三四、〇六一	
一九〇〇	四九、四二八、四七〇	九・一%
一九一〇	五六、三六七、一七八	一・三%
	六四、九二五、九九三	一・五%
		一・四%
		一・三%
		一・二%
		一・一%
		一・〇%
		〇・九%
		〇・八%
		〇・七%
		〇・六%
		〇・五%
		〇・四%
		〇・三%
		〇・二%
		〇・一%
		〇・〇%

之によつて見るに大戰前に於ては獨逸人口は十年毎に一〇%前後の高い増加率を示していたのである。

そこで従來の率を以て人口が増加したとすれば一九一九年末の人口は七千萬を超へてゐたであらうと考へられる。一方一九一九年八月八日の國勢調査の結果によれば當時の人口數は約六千四百四十萬餘であつて此間九百近い人口が失はれたことになるのである。尤も一九一九年の國勢調査人口は割讓せる地域の人口を含んでゐないから、兩者を直接比較することは出来ないが、然し之によつて見ても獨逸の人口が蒙つた損失が如何に莫大なるものであつたかを知り得るであらう。

歐洲交戰國が戰爭によつて受けた人口上の損失は大戰前後の國勢調査人口の比較によつても大體の程度は知り得るであらう。正確な觀察のために

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

は戰時中の移民運動を顧慮しなければならぬこと勿論である。大戰前後に於ける交戰國の國勢調査人口は次表の通りである。

調査年次	人口數	調査年次	人口數	調査年次	人口數
獨逸 ¹⁾	一五〇〇	一九一〇	一五二、三三三	一九一九	一四四、三六六 ⁴⁾
白耳義 ²⁾	一六〇〇	一九一〇	一六三、四四四	一九一九	一五九、七四九
佛西 ²⁾	一六〇〇	一九一〇	一六三、三三三	一九一九	一五九、三三三
伊太利 ³⁾	一六〇〇	一九一〇	一六三、三三三	一九一九	一五九、三三三
大ブリテン ³⁾	一六〇〇	一九一〇	一六三、三三三	一九一九	一五九、三三三

(單位一、〇〇〇)

- 割讓セル地域ヲ除ク。
- 1914年ノ領域。
- アイルランドヲ除ク。
- 外國ニアル七〇萬ノ捕虜ヲ含ム。
- 一九一九年ノ兵士及ビ外國ニアル船員ヲ含ム。

右の表を見る上に於て注意すべき事は、先づ獨逸については、數字の前後の比較を可能ならしむるために、一九一九年の調査時に全部或は部分的に割讓せられてゐた地域は、それ以前の調査からも除いてあるといふことである。第二は右の數字は外國にある捕虜を含んでゐることである。其の數は勿論概數である。

佛蘭西の一九二一年三月の國勢調査の内には外國にあつた兵士、船員合計十九萬を含んでゐる。

さて戦後の獨逸に於ける人口數については、實際の人口損失は數字が示してゐる以上に大であると考へなければならぬ。何となれば、戰爭直後、割讓地域及び露西亞より多數の人口が獨逸に流入したからである。

伊太利に於ては最近十箇年間(一九一〇—一九二〇)の人口増加數(二、五

九九千人)は戦死者、非戦闘員の死亡率上昇及び出生減退にも拘らず一九〇一—一九一一年(一、一九六千人)よりも大であつた。これは大戦前有數な移出民國であつた同國が戦時中に著しい移入超過に轉じたためであつて、一見不可解な人口増加は全く移民關係に基づくものなのである。

英國についても同様の状態が見られた。周知の如く英國は大なる移出民國であつたが、戦時中は逆に移入超過國となつたのである。之が戦後の英國の人口數を外見上増大せしむるに役立つたことは勿論である。

移民による人口運動は、之を世界全體として見れば全く見掛けのものに過ぎない。一國が得たところのものは他國の失つたところのものである。

然しながら一國の人口運動について見れば移民關係は人口運動の自然的因子と共に重要な一因子をなしてゐることは謂ふ迄もない。

更に移民關係は人口數に影響を及ぼすのみでなく、人口の年齢構成及び體性構成にも影響を及ぼすものであつて、或る場合には、之によつて人口運動の上に著しい影響を受けることがあるのである。例へばニュージーランド、オーストラリアの如き植民地の人口動態は、そこに見らるる特異の年齢體性構成によつて非常に顯著な特徴を示すことになるのである。

國際的の移民運動は非常に錯綜した關係にあり、資料も充分であるとはいへない。従つて之については別個に取扱ふのが適當であらう。ここでは紙面の都合上交戰國並に中立國の戦時中に於ける移民運動の變化について極めて概括的な觀察を下すに止めよう。

〔八〕 戦時に於ける移民運動

自然的因子のみでなく、人口運動の社會的、機械的因子も亦戦争によつて著しい影響を受けたのである。之によつて人口數の發展(今までは自然的因子に基づく發展について述べたのである)が何等かの程度に於て修正

を加へられたのである。

世界的に見れば、移民は何等人口減少をもたらすものではない。何となれば一國が失ふ處のものは他國が獲得するからである。

然し個々のものとして見れば、移民運動は一國の人口發展にとつて重大な意味をもつ場合があるのである。この事は、大なる渡洋移民國たる合衆國、カナダ、オーストラリア、アルゼンチン等の如く、その經濟的發展のために大なる勞働力輸入を必要とする國々について特に妥當するのである。

戦争が移民に及ぼした大なる變化のために、直接戦争に参加しなかつた歐洲外の諸國の人口運動も非常な影響を受けたのである。

概して云へば、戦時に於ける移民運動の變化は歐洲諸國に對し人口増加をもたらししたのである。交戰諸國に於ては、移出を禁止或は抑壓したのみでなく、兵力を増強するために他國より豫備軍を誘致したのである。

この意味に於ては、封鎖によつて海外との結合を殆ど完全に斷ち切られた中歐列強は最も不利な状態にあつたのである。

中立諸國に關しては、移民に對する直接的な軍事的抑壓は殆んど見られなかつたのであるが、經濟的理由によつて、移民運動は不振に陥つたのである。

先づ歐洲主交戰國の移民運動から始めよう。

獨逸の移出入民のバランスは第十九世紀全體を通じてマイナスであつた。即ち移出は通常移入よりも大であつた。第十九世紀の初期以來獨逸領土より海外へ移住せるものは六百萬を超へた。そして第二帝國成立以來、本國獨逸人の移出は移入を超へること二五〇萬に達した。一八七一年以來の移出入のバランスを示せば次表の如くである。(移入超過(+)移出超過(-))

(一九一〇年マデハ舊領域、ソレ以後ハザールヲ除ク現領域)

一八七五	一八七五	一八八〇	一八八五	一九〇〇	一九〇五	一九一〇	一九一五	一九二〇	一九二五	一九三〇	一九三五	一九四〇	一九四五	一九五〇
一七五	一八〇	一八五	一九〇	一九五	二〇〇	二〇五	二一〇	二一五	二二〇	二二五	二三〇	二三五	二四〇	二四五
(-) 三九七五〇	(-) 三八二、二八一	(-) 九六、〇二五	(-) 三九、二一〇	(-) 四八、八二〇	(-) 一、九〇〇	(-) 一、〇〇五	(-) 一、〇一〇	(-) 一、〇一五	(-) 一、〇二〇	(-) 一、〇二五	(-) 一、〇三〇	(-) 一、〇三五	(-) 一、〇四〇	(-) 一、〇四五
一九〇〇	一九〇五	一九一〇	一九一五	一九二〇	一九二五	一九三〇	一九三五	一九四〇	一九四五	一九五〇	一九五五	一九六〇	一九六五	一九七〇
九四、二五	五二、五二八	一五九、九〇四	三三〇、三七〇	二六三、九六一	二二五、〇〇〇	一九五、〇〇〇	一七〇、〇〇〇	一四五、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	〇、〇〇〇

右表によつて見るに獨逸は從來移出超過を例としたことを知り得るのであつて一九一〇—二五年が異常な時期であることは一見して明白である。此の時期に於ける、かくの如き顯著なる移入超過は、東部領土の割譲によつて、之等の地方の獨逸人が住居を見棄て本國へ逆流したことによつて生じたものであり、また失はれた保護領からの流入もあつたからであるといはれてゐる。然しながら一九一〇—二五年に於ける激しい移入超過は主として戦後に生じたものであつて、大戦中に於ける、移出の沈滞に因る間接的な人口増加は僅かに四萬餘に過ぎないと見られてゐる。従つて獨逸人口は、戦時中移民運動の影響を受けること極めて輕微であつたといはなければならぬ。

英國は元來移出超過國であることは今更述べる迄もないことであるが、戦時中は僅かながら移入超過に變つてゐる。従つて此の意味に於て戦時中の英國の人口は移民による人口減退から免れたのである。英國の移出入民は次表の如くである。

一九一四、一	移	出	移	入	移出超過	移入超過
一九一三、一						
一九一三						
一九一四						
一九一五—一八						
平均						
三三、〇〇〇						
五六、〇〇〇						
二七、〇〇〇						
三九、〇〇〇						
八六、〇〇〇						
三〇四、〇〇〇						
二一五、〇〇〇						
一〇四、〇〇〇						
一一一、〇〇〇						
四二、七〇〇						
三七、六五〇						
五、〇八〇						

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

英國の移民は戦後再び常態に復し、一九一九、二〇年には平均一二五、〇〇〇の移出超過を示すに至つたのである。

英國と共に移出民國として有名な伊太利の戦時に於ける移民状態の變化は興味がある。一九二二—一九一九年の伊太利の移民は次の通りである。

一九一〇	移出民	移入民	移出超過(+)
一九一〇	一三四、三〇〇	六一、一〇〇	七三、二〇〇
一九一〇	一六三、八〇〇	六四、一〇〇	九九、七〇〇
一九一〇	七四、七〇〇	一二六、三〇〇	五一、六〇〇
一九一〇	三〇、三〇〇	二八〇、五〇〇	(+) 二五〇、二〇〇
一九一〇	二五、五〇〇	八九、三〇〇	(+) 五一、八〇〇
一九一〇	九、二〇〇	四九、一〇〇	(+) 三九、九〇〇
一九一〇	七、〇〇〇	四八、九〇〇	(+) 四一、九〇〇
一九一〇	四〇、四〇〇	九〇、〇〇〇	(+) 四九、六〇〇

右の如く伊太利に於ける移民のバランスは戦時中全く變化したのである。一九一五—一八年の四箇年間に於て移入超過は三八四、〇〇〇に達した。

佛蘭西は歐洲に於ける主要なる移入民國である。大戦中の移入に關する資料は無いが、一九一一年と一九二一年に於ける國勢調査人口中に占むる外國人の割合が増加してゐることから、戦時中移入超過を見たであらう事は疑ひ無い。一九一一—一九三一年に於いて、佛蘭西人口中に占むる外國人の割合は次表の如く増加してゐる。

佛蘭西總人口數	外國人	外國人ノ總人口ニ對スル割合
一九一〇	三九、六〇四、九九二	一、一三三、六九六
一九一〇	三七、四九九、七六九	一、四一七、三五七
一九二〇	四〇、七四三、八九七	二、五〇五、〇四七
一九三〇	四一、八三四、九二三	二、八九一、一六八

従つて佛蘭西は戦時中移民其他の流入によつて、それだけ人口減少が表面に現れなかつたことになるのである。

白耳義については資料が得られなかつたが、この國に於ては戦前一箇年に約七千の移入超過を示してゐたといはれてゐるが戦時中移民運動は停止したといふことである。

要するに一般に歐洲主交戰國は戦時中移出によつて人口を失はなかつたのである。寧ろ人口は移民によつて増加したのである。

英國殊に伊太利に於ては、之に基づく人口増加は可成り顯著であつて、少くとも人口數に關する限りに於ては、戦死は移民によつて或程度相殺されたのである。

次に歐洲中立諸國に於ける移民運動について簡単に述べよう。

スウェーデン及びスペインを除けば歐洲中立諸國については、戦時中の移出のみを知り得るに過ぎない。従つて戦争中之等諸國の人々が移民運動によつて果して減少したか否かは分明しない。戦前に於てはスイスのみが僅少なる移入超過を示したのである。

中立諸國に於ける年平均移出は次表の通りである。

	一九一〇	一九一四	一九一五	一九一〇—一九一五平均	一九一九
デンマーク	八、六六九	六、二〇三	二、六一八	七〇%	三、三四一
オランダ	二、五八六	二、一七四	一、〇〇三	六一	二、四三九
ノルウェー	一、二、五九二	八、五三二	三、三六二	七三	二、四三三
フィンランド	一、四、七九一	六、四七四	三、五〇〇	七六	一、〇八五
スペイン	二、一、二〇〇	二、九、六〇〇	七、四〇〇	六五	一、〇、〇〇〇
スウェーデン	二、一、五九六	一、二、九六〇	七、三三四	六六	七、三三七
スイス	五、六八八	三、八六九	一、〇〇〇	八〇	三、〇六三
合計	二七、〇九五	一六、九八〇	九、三三七	六六	二、一、六九七

右の如く中立諸國に於ける戦時中の移出數は約三分の一に減少したのである。

スウェーデン及びスペインについては戦時中の移出移入を知り得る。移民バランスは次表の如くである。

	一九一〇	一九一四	一九一五	一九一〇—一九一五平均
スウェーデン (-)	一、三、四三〇 (-)	四、三三四 (-)	一、三九一 (+)	四七二
スペイン (-)	九、二〇〇 (+)	六、五〇〇 (+)	九、二〇〇 (-)	一七、〇〇〇

右の如くスウェーデンの移出超過は戦時中十分の一に減少したのである。反之スペインでは戦時中移民バランスは移入超過に變化したのである。尤もスペインは戦後再び移出超過に轉じてゐる。

之を要するに歐洲主交戰國のみならず、中立諸國の移民運動は戦時中非常に縮小したことが分るのである。従つて、之等の年に於ては人口發展は全然自然的因子によつて決定されたと謂ひ得るのである。但し英伊持に伊太利は例外である。

次に渡洋移入民國についての大陸間移民について極めて概括的な展望を行つてみよう。

渡洋移入民國の内でも最も重要なものは合衆國、英自治領、アルゼンチンである。之等の國は管ては莫大なる移民を歐洲諸國より入れて、それによつて人口は非常に急速な發展を見たのである。戦争は之等の諸國に於ける移民運動に對しても大きな影響を與へたのである。

合衆國の數字(年平均)は次表の通りである。

自一九〇七—一九一〇	一九一〇—一九一四	一九一四—一九一五	
入國者數	一、三、九四〇	五、四八〇	六、四六〇
出國者數	—	—	—
入國者超過	一、三、九四〇	五、四八〇	六、四六〇
對スル減少	—	—	—
公ノ移入	—	—	—
對スル減少	—	—	—

自一九二七—	三三三,九〇〇	二四〇,九〇〇	一〇三,〇〇〇	八三%	二七,九〇〇	七%
至一九二六—	—	—	—	—	—	—
自一九二七—	—	—	—	—	一四一,〇〇〇	六六%
至一九二六—	—	—	—	—	—	—

三大英自治領に於ける移民の動きも之と類似のものであつた。カナダについては移入民を知り得るのみである。軍隊輸送は數字の内に含まれてゐない。年平均の移民運動は次表の通りである。

濠洲

年	移入	移出	移入超過	移出超過
一九一〇—一三	一三六,六五〇	六八,二〇〇	六八,四五〇	—
一九一四	一一〇,五〇〇	九三,九〇〇	一六,六〇〇	—
一九一五—一八	四五,四五〇	四八,九五〇	—	三,五〇〇
一九一九	五九,二〇〇	六一,四〇〇	—	二,二〇〇
ニュージールランド	—	—	—	—

一九一〇—一四
一三ニ對スル
減少率

年	移入	移出	移入超過	移出超過
一九一〇—一三	四一,六〇〇	三三,九〇〇	七,七〇〇	—
一九一四	三七,六〇〇	三三,五〇〇	五,一〇〇	三四%
一九一五—一八	一八,七〇〇	一七,三〇〇	一,四〇〇	八二%
一九一九	二〇,九〇〇	一九,九〇〇	一,〇〇〇	八七%

移入民數 一九一〇—一四
ニ對スル減少率

年	移入民	移出	移入超過	移出超過
一九一〇—一三	二八五,二〇〇	一三三,九〇〇	一六一,三〇〇	—
一九一四	一一五,三〇〇	一七八,七〇〇	—	六三,四〇〇
一九一五—一八	二七,五〇〇	六五,〇〇〇	—	三七,五〇〇
一九一九	四一,三〇〇	四一,三〇〇	—	一,〇〇〇

アルゼンチンに於ける海路による移出入民は年平均次の通りである。

年	移入民	移出	移入超過	移出超過
一九一〇—一三	二八五,二〇〇	一三三,九〇〇	一六一,三〇〇	—
一九一四	一一五,三〇〇	一七八,七〇〇	—	六三,四〇〇
一九一五—一八	二七,五〇〇	六五,〇〇〇	—	三七,五〇〇
一九一九	四一,三〇〇	四一,三〇〇	—	一,〇〇〇

以上五大移民國について見るに傾向は同一である。全移民運動は量的に著しく減退した。

全體として見て戦前に比して戦時中の移民減少は略々七〇%に達したのである。

合衆國及びニュージールランドに於ては戦時中の移入超過は極めて僅かであつた。

濠洲及びアルゼンチンでは移民運動はマイナスであつた。かかる移民の減少が人口運動に影響することは當然である。

以上を以て見るに戦時中に於ける移民運動は交戦國に於ては勿論、中立諸國に於ても少なからざる影響を受けたのである。右の如き全世界にわたつて見られた戦時中移民運動の變革が戦後の交戦國の人口數に何等かの程度に於て影響したことは勿論であるが、概していへば戦後歐洲主交戦國の人口は殆ど出生死亡の自然的因子によつて決定されたものであるといひ得るのである。

更に體性別に見たる移民運動の變化は、人口の體性構成を變化せしむる因子として重要な意義を有するものである。之について詳しく論ずることは本文の目的でないから、ここでは極めて簡単な記述に止める。

先づ移入について見れば、合衆國、濠洲、カナダ、ニュージールランド、アルゼンチン、キューバの六箇國を全體として見れば、年々の男女別移入民は次の通りである。

年	男	女	合計	男子ノ割合
一九一〇—一三	一,二〇六,二〇〇	五七一,三〇〇	一,七七七,五〇〇	六七.九%
一九一五—一八	二九九,一〇〇	一七一,三〇〇	四七〇,四〇〇	六三.六%

次にデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、オランダ

ダ、スイス、ポルトガル、イタリー、スペインの九箇國から移出したものの年平均は次の如くである。

	男子	女子	合計	男子ノ割合
一九一〇—一三	七九、八〇〇	二三八、五〇〇	一、〇二一、三〇〇	七、七六%
一九二五—一八	一一四、一〇〇	七五、五〇〇	一九九、六〇〇	六二、二%

尙右の移出民は行先は不明である。

以上に見らるる通り移入民、移出民とも戦時に於て、男子の割合が減少してゐるのである。

一九一〇—一三年に六大移入民國に對し年々六十三萬五千の男子超過移入が見られたのである。然るに戦時中それは僅かに十二萬八千に過ぎなかつたのである。

又先に述べた九つの歐洲移民國は戦前に於て年々五十六萬の男子移民超過を示してゐたのであるが、戦時中には僅かに五萬に減少したのである。

以上述べた處は移出民國、移入民國を全體として觀察したものであつて、個々の國については状態が如何に變化したかは詳でない。

しかし右の如き趨勢は、交戦諸國に於ける、戦死に基づく女子超過の激化傾向を多少とも緩和したものと考へられるのである。

〔九〕 大戦後に於ける年齢別性別構成の變化

戦争は出生減退、死亡増加或は移民運動の變革を通じて交戦國は勿論のこと、中立諸國の人口にさへ著しい量的損失を與へたのである。然し人口に及ぼした戦争の影響は單に人口數の減少のみではない。交戦國に於ける人口の構成は非常な變化を受けたのである。人口に於ける構成上のかかる變化は經濟的にも社會的にも重大な意義を有するものである。

戦争が戦傷病者を除いて、一般市民人口の質の上に及ぼした影響も極め

て大であつたと信ぜられるが、此方面に關しては専門家の研究が多數發表されてゐるであらうからここには述べない。

さて戦死の結果として、性比が男子に不利となつたことは當然である。

然し男子についても年齢構成は非常な變化を受けたのである。之は戦死者が一定年齢階級に屬するものであることの當然の結果である。死亡の上に及ぼせる戦争のこの選擇的作用は、國民經濟的に莫大な損失の原因となつたのである。

女子の死亡は戦時中非戦闘員男子の死亡に比し若干多かつたのである。加之女子の死亡も年齢階級別に相等の差違を示したのである。

更に移民運動によつても年齢構成の變化が生じたのである。

出生減退もまた人口の年齢構成を破壊した。即ち出生減退によつて人口ピラミッドの基礎が小さくなつたのである。

戦争後に於ける各國の年齢構成の變化について、いちいち述べる事は必要ないであらう。

ここでは獨逸を例にとつて、戦争がどれ程までに人口の構成を攪亂するかについて述べるに止めやう。獨逸以外の交戦國に於ける人口構成の變化も大體同じ型を採つたものと考へられるのである。何となれば獨逸の年齢構成を變化せしめたと同一の原因が之等の國にも作用したからである。

世界大戦を挟んで、之に最も接近した國勢調査は一九一〇年十二月一日の國勢調査と一九一九年八月八日の國勢調査である。右の二つの國勢調査の外に、戦時中に公務上の目的に供するために臨時的な調査が行はれてゐる。一九一七年十二月五日の調査がそれである。然しこの調査は簡易調査であつて、詳細な結果については發表されてゐない。従つてここでは専ら一九一〇年と一九一九年の調査によつて年齢構成の變動を觀察することに

する。

尤も一九一七年の調査によつて男女別現住人口数は判明してゐるから参考までに次に掲げて置かう。

年	男子人口	女子人口	合 計
一九一〇	三二,〇四〇,二六六	三二,八八五,八二七	六四,九二五,九九三
一九一七	二七,七五六,六〇八	三四,八五八,六六七	六二,六一五,二七五
増(+)、減(-)	(-) 四,二八三,五五八	(+) 一,九七二,八四〇	(-) 二,三一〇,七一八
1) 1,580,861ノ捕虜ヲ含ム。			

さて一九一〇、一九一九年の國勢調査人口を四つの年齢階級と男女に分てば次の通りである。

尙一九一九年の數字には外國にある獨逸兵捕虜七十萬を加算してある。
(單位一,〇〇〇)

年 齡	一九一〇		一九一九	
	男	女	男	女
〇—四 ¹⁾	三,九二三	三,八六七	一,九四〇	一,八八一
五—一七	九,一一八	九,〇六一	八,七一五	八,六三六
一八—五〇	一四,六七二	一四,八二〇	一四,二〇六 ²⁾	一五,七六一
五一以上	四,三二七	五,一三八	四,六一一	五,三五三
合 計	三二,〇四〇	三二,八八六	二九,四七二	三一,六三一
1) 1910: 生後59箇月マデヲ含ム。				
1919: 生後57箇月ヲ僅カニ越エタルモノマデ含ム。				

2) 調査時ニ外國ニ在リシ捕虜70萬ヲ含ム。

右の二つの數字を直接に比較することは出来ない。何となれば一九一九年の領域は一九一〇年に比して狭められてゐるからである。

然し之等の實數は非常に示唆に富んでゐる。

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

例へば一九一九年に於ける五歳未満の人口は一九一〇年の半分にも及ばないのである。更に一八—五〇歳の年齢階級に於ては、女子超過が如何に激化せるかを示してゐる。即ち一九一〇年には約十五萬なりし女子超過は一九一九年には約百五十五萬と百四十萬の増加を來したのである。先に述べた如く戦死數は百八十萬であつたから、之と女子超過百四十萬との差四十萬は一部は戦時に於ける女子死亡超過、他の一部は移民運動に歸因するものと考へられる。

右に示した人口構成の變化をより明瞭に示すために、一九一〇、一九一九年の年齢階級別人口を一口一萬について示せば次表の如き結果を得る。

年 齡	一九一〇		一九一九	
	男	女	男	女
〇—四	六〇四	五九六	一,一〇〇	三二八
五—一七	一,四〇四	一,三九六	二,八〇〇	一,四二六
一八—五〇	二,二六〇	二,二八三	四,五四三	二,三三五
五一以上	六六六	七九一	一,四五七	七五五
合 計	四,九三四	五,〇六六	一〇,〇〇〇	四,八二四
			四,八二四	五,一七六
				一〇,〇〇〇

右の如く年齢構成と男女比は完全に變化したのである。〇—四歳人口は男女共殆ど半分に減少した。出生減退の結果であること謂ふ迄もない。この結果として一九一九年に於ては高年者の割合は一九一〇年に比して高くなるを得なかつたのである。

一八—五〇歳の年齢階級に於ける變化は特に著しい。殊に體性別に見るならば非常な變化を示してゐる。一九一〇年に於て女子超過は一%であつた。然るに一九一九年には、それは一%へ増加したのである。

次表は男女比が如何に變化したかを示してゐる。一九一〇、一九一九年

に於ける各年齢階級男子一、〇〇〇につき女子数は次の如くである。

年 齡	一九一〇	一九一九
〇—四	九八三	九七〇
五—一七	九九四	九九一
一八—五〇	一、〇一〇	一、一〇九
五一—以上	一、一八七	一、一六一
合 計	一、〇二六	一、〇七三

之によつて見るに全年齡階級を全體として見れば女子超過は三倍に増加したのである。然し之を年齢階級別にみれば、女子超過は全然兵役義務年齢について増加したことを知り得るのである。他の年齢階級について見れば女子超過は却つて低下したのである。兵役義務年齢に於ける女子超過の激化が主として兵員の戦死によつて生じたものであることは謂ふ迄もない。然し兵役義務年齢の男子が各年齢平等に戦死した譯ではない。従つて正確な状態を示すためには兵役義務年齢は更に細かく分つて觀察することが必要である。

一九一九年に於ける五歳階級男子一、〇〇〇につき女子は次表の通りである。(捕虜を除く)

年 齡 階 級	男子一、〇〇〇ニ ツキ女子
二〇—二四	一、二六三
二五—二九	一、三四四
三〇—三四	一、二二八
三五—三九	一、二三三
四〇—四四	一、〇七二

之によつて見るに一九一九年の女子超過は二五—二九歳で最大であり、之に次いで二〇—二四歳に於て大である。二五—二九歳以上の年齢階級に於ては女子超過は漸次縮少してゐる。

右の如く、二五—二九歳といふ、婚姻と再生産について最も重要な年齢に於て最大の人口喪失を來したといふことは、戦後の人口運動にとつて非常な傷手であるといはなければならぬ。

獨逸以外の諸國に於ける戦後の男女比を参考のために掲げて置かう。

國 名	戰 前	戰 後	國 名	戰 前	戰 後
獨 逸 ¹⁾	一、〇二六	一、〇七三	ギリシヤ	九八七	一、〇一三
大ブリテン ²⁾	一、〇六七	一、〇九三	デンマーク	一、〇六一	一、〇五三
濠 洲	九二一	九六九	ノルウエー	一、〇九九	一、〇六九
ニュージ ランド	八九六	九五六	スウェーデ ン	一、〇四六	一、〇三六
南阿聯邦 ³⁾	八六三	九四二	フィンラン ド	一、〇一四	一、〇二四
白 耳 義	一、〇一七	一、〇三三	オランダ	一、〇二一	一、〇一〇
ユーゴス ラビア	九三七 ⁴⁾	一、〇四二	スイス	一、〇三四	一、〇七七
ルーマニア	九七九	九八五	合 衆 國	九四三	九六一
ブルガリア	九六二	九九七	日 本	九七九	九九五

- 1) 外國ニ在ル捕虜ヲ含ム。
- 2) アイルランドヲ含マズ。
- 3) 白人人口ノミ。
- 4) 舊セルビア(ボスニア、ヘルツェゴビアノ數字ハ僅カニ改メタル)。

之によつて見るに戦後に於て、男子一、〇〇〇に對する女子數の増加しなかつた國は僅かに、デンマーク、ノルウエー、スウェーデン及びオランダの四箇國に過ぎず、他の諸國に於ては、程度は異なるも、孰れも女子數の増加を示してゐるのである。後者の内で女子數の最大増加を示したのはユーゴラビアにして最低はルーマニアである。

男子に對する女子の割合の變化の原因については、歐洲諸國に於ては主として男子の死亡超過、又英自治領、合衆國、日本に於ては移民運動の激變と考へることが出来る。

先に指摘したスカンヂナビア諸國及び和蘭に於ける女子超過の緩和は移民運動に基づくものである。

中立國の内ではスイスは例外をなしてゐる。

ここでは交戦國と同様に女子過剰は激化してゐるのである。

露西亞についてはソビエト政府によつて發表された統計がある。それによれば一九二一年に於て男子一、〇〇〇につき女子は一、二二九である（戦前は一〇四三）。恐らくこの數字は正確ではないであらう。然し露西亞の如く、歐洲戦争と國內の革命戦争の二重の損害を受けたことを考慮せば、女子超過も非常に激化したであらうと想像されるのである。ボルシェビキ革命後には集團的な逃亡が行はれたのであるが、之等の内男子が女子よりも多かつたと考へられるから、この點からも女子超過は一層促進されたことと思はれる。

之を要するに戦争は程度の差こそあれ、いづれの交戦國の年齢構成、男女比を激變せしめたのである。之等の變化は交戦國民をして非常に困難なる社會問題、經濟問題、或は人口政策の問題に直面せしめたのである。

(10) 要 約

我國が現在までの處支那事變によつて、人口の上に蒙つた損失は、前歐洲大戦時に於ける獨佛等に比較せば問題にならぬ程輕微であつたことは當然でもあり、又誠に幸なことである。然し事變が今後長期にわたつて繼續する場合、或は支那事變が世界戦争にまで擴大發展した場合を豫想すれば、我國人口も今後相當深刻な傷害を受けるであらうと考へられる。場合によつては第一次大戦時に於ける獨佛と同程度の人口傷害を蒙るかも知れないといふ覺悟だけはして置くことが必要であらう。

獨逸は第一次大戦に、足掛け五箇年を通じて千三百二十五萬といふ大規

前歐洲大戦時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

模な動員を行つたのであつた。之を一九一四年々央の推計人口數六千七百七十九萬に對比すれば略二〇%に當るのである。人口數の半ばを男子人口と假定すれば、その割合は約四〇%となる。男子人口中兵役に關係なき老人や子供を除外して考へれば、兵役義務年齢男子の殆ど全部が少くとも一度は動員されたことになるであらう。

戦場で失はれた生命は百八十萬餘にして、之を動員數に對比すれば、動員千につき一二九、その内負傷による死亡は一一五、疾病による死亡一四といふ割合であつた。

戦死數は一九一四年總人口千につき約二七、又之を二〇―四五歳男子人口千につき見れば一四九といふ極めて高い率となる。

戦死以外に四百二十五萬の負傷者を出した。右の如き莫大な戦死者と負傷者、及び恐らく非常な多數に上つたであらう戦病者は最も活力あり、婚姻と再生産に關して最も重要な年齢に該當するものであり、又國民經濟にとつても最も重要な生産年齢に相當することを考ふれば、之等の戦死と負傷或は戦病者が民族力と國民經濟力とに如何に大なる破壊的影響を與へたかは推測に難くない。

戦死傷病數は兵力、戦争の期間、敵軍隊の裝備の如何、敵軍隊の兵力、作战方針、戦場の地理的條件等によつて非常な差違を示すものであつて、豫め之を推測することは不可能であらう。

然し我々は戦闘員の戦死と戦傷病について、これ以上述べる必要はないであらう。之等は戦争を遂行するために眞に避け難き犠牲である。戦死と戦傷病に基づく民族力の喪失を最小限に止むるための手段方法の研究は戦術家と軍陣醫家に委ねらるべきである。

そこで我々は一般國民の努力によつて、戦時人口損失を輕減せしめ得る

側面に目を轉じよう。

先づ婚姻數については、戦時中主交戦國の婚姻は平時に比して四〇—五〇%の減少を來したのであつた。戦時に於ては多數の婚姻適齡男子が出征し、従つて之等の男子は婚姻に關する限り暫時婚姻市場より消滅する事となる。更に之等の男子が戦死した場合には、婚姻可能性は全然消滅する事と謂ふまでもない。

又國內の産業其の他の業務に活動してゐる若い男子も近い將來に召集を豫期せる場合には婚姻を一時見送ることが少くないものと想像される。

女子の側に於ても、戦争の進行と共に産業、職業活動に従事すること愈、多くなるに従つて、この關係から婚姻の延期される傾向が強まるであらう。更に戦時經濟事情は一般に婚姻に對し妨害的に作用するものと考へられる。戦時に於ける物價騰貴殊に生活物資の騰貴と缺乏は男女雙方に對して婚姻の意思を抑制する作用を營むであらう。

戦時婚姻減退の程度を決定する最も重要な因子は動員の規模と經濟狀態殊に生活物資の供給と物價水準の如何であらう。又戦争の進展と共に經濟諸部門間に跛行狀態を生じ、不振産業従事者中には失業或は半失業の狀態に置かれるものを生ずるであらう。かかる場合其等の者の經濟的地位が改善されざる限り婚姻は延期されざるを得ないであらう。

かくの如く考ふるとき、程度の差はあれ、戦時に於て婚姻が減少することとは誠に避け難きことと思はれるのである。

然しながら戦時婚姻は戦時或は其の後の出生減退を補填するための源泉として出來得る限り促進されることが必要である。

戦時婚姻維持の手段としては、婚姻貸付金制度、更に婚姻後の家族の生活を保證するものとしての子女扶助金或は家族手当制度等の謂はば本格的

方策の外に、物價騰貴特に消費財の價格騰貴防止、生活必需品の圓滑なる配給等の經濟的措置、職場の婚姻獎勵、結婚紹介機關の擴充等の技術的方策、職業を有する妻に對する育児を容易ならしむる諸施設を講ずるといふ如き社會的施設等を含む多種多様の方策が存するであらう。之等の内最も中心をなすものは婚姻後の生活の安定を或程度に得せしむることであらう。

婚姻獎勵のための根本的な施策を大規模に又眞に效果ある如く實施することは誠に望ましいことではあるが、之が實行に當つては相當の困難を伴ひ、早急には實行し難いといふ場合もあらうかと推察される。婚姻貸付金制度其の他の根本的な方策も、其等がより大なる人口政策體系の内に織込まれてはじめて、婚姻増加、婚姻年齢低下の効果を發揮するものであつて、若し其等が單獨に實施せらるる場合には、之等に大なる効果を期待することは適當でないであらう。

戦時婚姻について、更に好ましくからざる現象は婚姻年齢の上昇といふことである。獨逸の平均婚姻年齢は大戦前には男子は略、二八・九歳、女子は二五・七歳に安定してゐたのであつた。然るに戦時には之等は上昇し、一九一八年には男子は三一・二歳、女子は二七・一歳と一九一四年に比し男子は二・三歳、女子は一・四歳の上昇を示したのである。之を初婚者のみについて見れば同期間に男子は一・二歳、女子は一・一歳の上昇となつてゐるのである。

男子の婚姻年齢上昇は、比較的若い者が多數出征、或は戦死し、従つて銃後にある比較的高年者の婚姻割合が増加する結果であると考へられる。

女子の婚姻年齢上昇は婚姻延期を意味するものであるが、その動機については種々のものが考へ得る。先にも述べたやうに、女子の産業活動の結

果として生活水準或は収入と生活の關係に關する意識を深めることとなるであらう。これはその他の經濟事情例へば物貨騰貴、物資缺乏、生活難等と共に婚姻を遅延せしむる原因として作用するであらう。又婚約中の男子が出征したといふやうな事情のために婚姻が延期されてゐる場合も少くないであらう。この場合には婚約中の男子が歸還せざるに限り婚姻は問題とならないであらう。

概して婚姻を減少せしむる原因は同時に婚姻年齢を高むるものと謂ひ得るであらう。

さて人口政策確立要綱は今後十年間に我國婚姻年齢を現在に比し概ね三歳引下ぐることを目標としてゐるのであるが、戰爭に基づく婚姻年齢上昇を抑制し、且更に積極的に婚姻年齢を引下ぐるについては若干の困難を伴ふものと豫想されるのである。

次に出生についてであるが、第一次大戰中に於ける歐洲主交戰國の出生減退は平時に比して四〇%前後に達してゐる。出生は新たな婚姻に期待する以外は、既に存在せる夫婦の出産力に俟つ外に途はない。これは更に出征者夫婦と銃後の夫婦に分けて考へなければならぬ。

出征者夫婦殊に内地在營の兵員に關しては出生維持の見地よりする賜暇制度を出來得る限り大規模に實施することが望ましい。然し兵員は何れも緊急の軍務を帯びて、家族を離れて活動してゐるものであるから、一般に賜暇制度には餘りに多くの期待を掛けることは適當でないであらう。それ故戰時出生減退中、夫の召集に基づく部分は先づ不可避的なものと考へて置くことが安全であらう。

そこで戰時出生維持の任務の多くの部分を擔ふものは一般銃後にある既婚の夫婦でなければならぬ。

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

最近年我國の出生率が低下の傾向にあることは周知の通りである。そして支那事變第二年には戰時の定型的出生減退が現れたことも先に述べた通りである。今後事變が更に擴大、長期化した場合我國の出生減退が先の大戦に於ける主交戰國に於ける例を再現しないとは保證し難いやうに思はれる。我國の出生数が年々百萬に下るといふ時期が絶対に來ないと斷定することは安全でないであらう。

戰時に於て婚姻を奨励するとともに、出生増加を圖るために採らるべき方策については理想的には如何なるものをも指摘することが出来る。然し戰時應急人口對策としては、先づ早急に實現可能なるものが最も價値をもつのである。

かかるものとしては實に多種多様な方策があらうかと考へられるのである。然し之等の方策について検討を加へることは本稿の目的ではない。

ここでは單に何人にも明白な一、二の應急策に言及するに止めよう。先づ最も必要なことは戰爭に基づく、大家族に對して特に不利な經濟的條件を極力緩和することである。

家族の存在を前提せざることを原則とする現在の賃銀、俸給制度に於て、戰時下に於ける家族の擴大を妨害する最も有力な因子の一つは物價騰貴と生活必需品の缺乏(或は偏在)であらう。

生活必需品の公平なる分配の手段として、漸次公定價格と切符制度或は配給制度の擴充を見つづけることは、人口の見地よりしても眞に喜ばしきことと謂はなければならぬ。この意味に於て切符制度の擴充は配給機構の整備或は轉業問題とも關聯して極めて重大な問題である。更に配給の圓滑化、公平化は母性の健康のため従つてまた出生兒の健康のためにも好ましく影響を及ぼすものである。食糧の購入のために寒空に、數時間を空費

した數人の子供を抱へた母親は、家事の處理のために、それだけの睡眠時間を犠牲にしなければならぬのである。銃後國民の過勞殊に負擔の重い母性の過勞を極力排除することは、母子の保健の見地に於いてのみならず、出生に對しても好ましき影響を與へるであらう。

生活必需品に對する切符制、配給制の擴大強化と生活物資の價格騰貴抑制は最小限の要求として早急に又強力に實施される必要がある。

次に非戦闘員の死亡について簡単に述べよう。

第一次大戦中(一九一五—一八)獨逸に於ける乳兒死亡を含まざる非戦闘員の死亡は、平時に比し二五%増加したのである。之を男女別にみれば男子は二〇%、女子は三一・七%の増加である。

乳兒死亡は戦時出生減退の結果として激減したことは當然であるが、然し乳兒死亡率も戦争によつて殆ど影響されなかつたと謂ひ得るのである。かかる事實は戦時中乳兒が最も恵まれた環境にあつたことを示すものであらう。戦時に於ける乳兒死亡率低下の實例は、若し對策にして適正であるならば、同時に幼少年及び成人の死亡についても改善の可能性大なることを示唆するものであつて、我國に大なる希望を抱かしむるものである。

平時に比して戦時に於ける女子の死亡増加が男子よりも甚だしかつたのは、男子人口が出征によつて半分にも激減したといふ事が主要な原因である。然し女子市民人口の死亡激増といふ事實は銃後國民の衛生状態の悪化せることの明白なる證左である。

死亡は幼少年に於て最も増加し、次いで妊孕期にある女子に於て顯著であつた。

聯合國側で採つた食糧封鎖が其の効果を發揮した一九一七年には死亡は激増してゐる。

かかる事實は市民死亡と食糧供給とが密接な關係にあることを示すものであらう。

戦時市民死亡増加は死因の方面から觀察されなければ真相を捕捉し難い。この問題については目下資料の検討中であるが、問題の性質上醫家の研究に委ねるのが適當であらう。

戦時中死亡數の激増を來せるものは流感、肺炎、肺炎以外の呼吸器疾患、老衰等に因るものであつて結核に因るものも相當増加してゐる。

『流行性感冒が戦争の結果であるか否や、或は如何の程度戦争の影響を受けたかといふことは決定し難い問題である。然し戦時缺乏状態(過勞、營養不足)が傳染病の蔓延に對し非常に都合な條件であつたといふ事は疑ふ餘地はない』とグラデーチェは述べてゐる。

然し一九一八年に於けるロンドンの流感死亡率は市民人口一萬につき三・一、シカゴ市は二・二といふ高率を示したるに拘らず、ベルリン市では僅かに一七・二に過ぎなかつたといふ事實がある。英米の人口が戦争の影響を蒙ること獨逸に比して輕微であつたことは、之等の國の戦時中の出生率、死亡率の推移が之を證明してゐる。従つて戦時食糧難或は過勞と流感死亡との間に、或は想像されるであらう程密接な關係があるや否やは更に考究を要する問題である。

然し戦時に於ける流感による死亡激増については營養不足と過勞を相當重視する意見が多いやうに考へられる。戦時傳染病の蔓延を未然に防止するため、戦時傳染病と物資缺乏特に營養との關係についての研究が徹底的に行はれることが必要であらう。

戰時中に於いて肺炎による死亡が激増したのであるが、これは流感に随伴せる現象であることは疑ひない。

食糧難或は國民の過勞が流感又は肺炎による死亡激増とどの程度の關係があるかは別としても、之等の因子が一般國民の健康に無關係であつたとはいへない。

例へば結核死亡率であるが、一般に戰時食糧状態が劣悪であつた國は甚だしい結核死亡率の上昇を示したのである、結核は其の威力が或程度榮養状態に平行する疾病であるといはれてゐる。従つて戰時食糧難が結核死亡率増加の一因であることは疑ひない。

戰時中女子殊に妊孕年齢女子の死亡が最も大なる増加を示してゐる。この内の大きな部分は流感によるものであるが、産褥熱といふ出産に最も關係ある疾患による死亡も著しい増加を示してゐるのである。産褥熱による死亡の増加は出産用衛生材料の品質低下及び缺乏によるものであるといはれてゐる。ここに出産に關聯して流死産について一言せば、流死産の内の多くのものは對策にして適當であるならば立派に生ける出産に轉換し得るものであるといはれてゐる。之等の對策は早急に實施する可能性も比較的大であるやに想像されるのみでなく、對策の効果が略、確實に豫期し得るといふ二重の利點を有するものであるから、戰時人口對策としても最も重要な部分といふべきである。一般に死亡減少の方策は比較的確實に其の効果を擧げ得るといふ意味に於て、戰時應急人口對策としては高く評價されるべきものと思はれる。

之を要するに食糧、衛生資材等、一般に生活物資の確保に成功するならば戰時死亡は相當に減少せしむることを得るものと考へられる。此の事たるや同時にまた婚姻、出生維持増進のための最小限の要求でもあるのである。

前歐洲大戰時に於ける獨逸を中心とする諸國の人口情勢

。従つて生活物資の價格騰貴抑制、公平圓滑なる配給は戰時に於ける應急人口對策の基幹たるものといふべきである。

そこで國民生活を維持して行くためにどれだけの物資を必要とするか、量と質の觀點より食糧の最低必要量は如何、被服材料は健康を維持する上に最低何程を必要とするか、住宅資材の供給は如何なる程度に見込むべきであるか等々、衣食住全般にわたつて、全體的な計數を先づ科學的に調査確定する必要がある。

次に之と現實の生産或は供給とを睨み合せて、最も有效な物資の利用計畫を樹立しなくてはならない。現在の我國について見れば、物資の全體としての供給量の過不足は兎に角、食糧、建築資材、被服材料等について、まだまだ濫費されてゐる部面があるものと考へざるを得ない。

戰時應急人口對策の實施に當つては國民全體を通じて、最高度の協同が必要であつて、全國民が持場に應じて最善の努力を拂ふならば戰時人口損失は嘗て見ざる輕微なものに終るであらう。

終りに本稿執筆に當り参照した主なる論者は左記の通りである。

○Döring, Der Einfluss des Krieges auf die Bevölkerungsbewegung und den Bevölkerungszustand. in: Handw. d. Staatsw. 4. Aufl. Bd. 11.

○H. Grawatz, Die Bevölkerungsentwicklung nach dem Kriege, 1919.

○Bungdörfer, Aufbau und Bewegung der Bevölkerung, 1935.

○A. M. Carr-Saunders, World population, 1937.

○(Wirtschaft und Statistik, 1. Jahrg. (1921))

○Fruchtbarkeitsziffer, Säuglingssterblichkeit und Folgeburtengnote im Deutschen Reich 1900 bis 1920.

○Die Eheschliessungen im Deutschen Reich

○Alter der Heiratenden im Deutschen Reich vor und nach dem Kriege.

○ Die Häufigkeit der unehelichen Geburten während der Kriegsjahre.

○ // 2. Jahrg. (1922)

○ Die Kriegesheere und ihre Verlust im Weltkrieg.

○ Die im Weltkrieg Gefallenen nach Alter und Familienstand.

○ Der Frauenüberschuss nach dem Kriege.

○ Die Sterbefälle in den Jahren 1913 bis 1918 nach dem Geschlecht und dem

Alter der Gestorbenen.

○ Die Tuberkulose in Europa.

○ // 3. Jahrg. (1923)

○ Die in Deutschland gestorbenen feindlich Kriegsgefangenen und die in de

Gefangenschaft gestorbenen deutschen Soldaten.

○ Die deutschen Verlust im Weltkrieg nach Todesursachen.

○ Die Sterblichkeit nach Todesursachen im Deutschen Reich während der

Jahre 1912 bis 1920

○ Die Geburts- und Sterblichkeitsverhältnisse in den grössten Städten der

Welt in den Jahren 1913 bis 1922.

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x